女流文藝雜誌

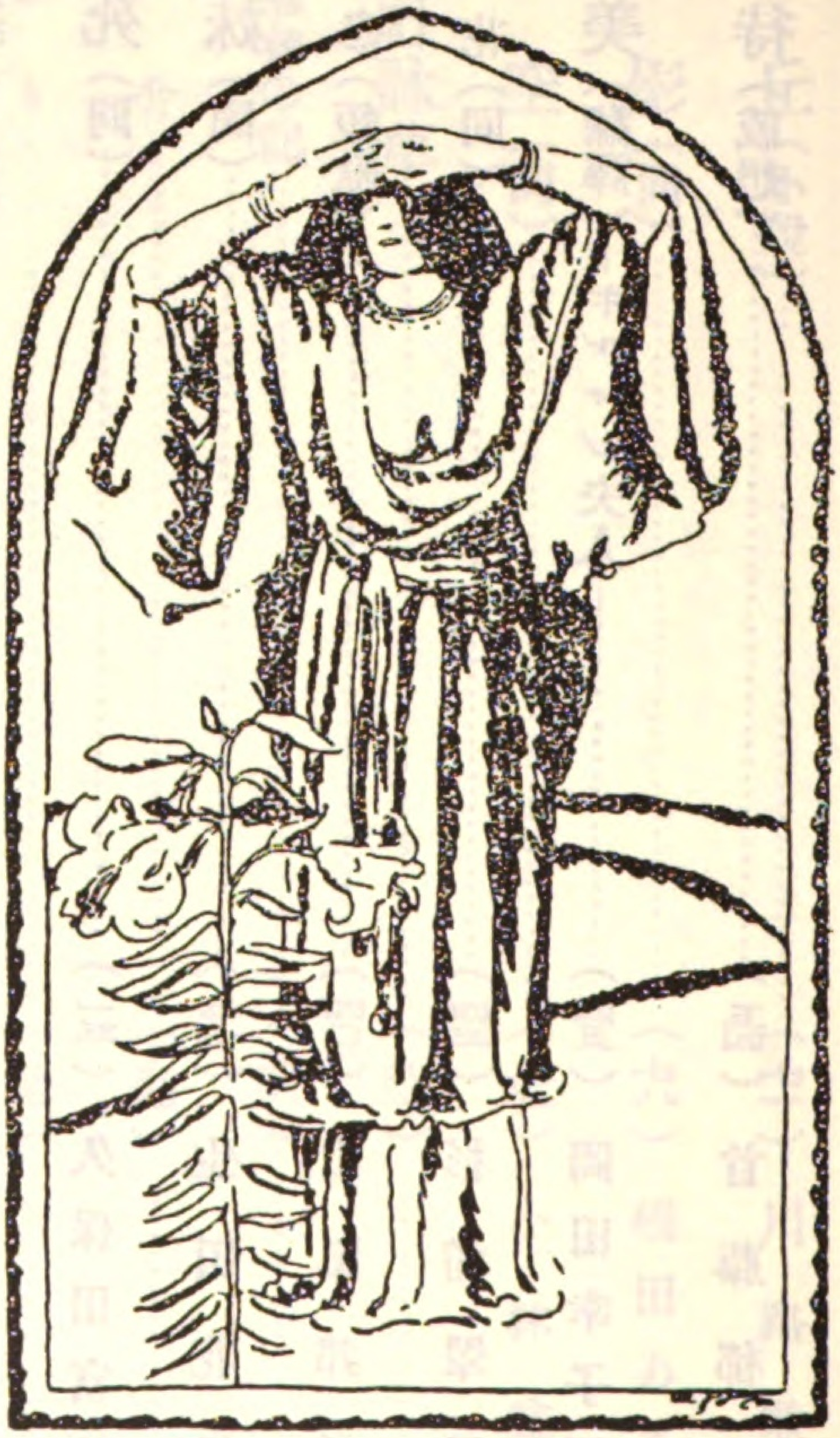
ビアトリス



十一月號

ビアトリス

第一巻第五號



ビアトリス
第一巻第五號　目次

我れは屢々見たり、朝ぼらけ
東は薔薇もて飾られ、
空あきらかに、日の女王の
柔かき影して高くのぼるを、
その輝きは狭霧もてつつまれたれば、
我が眼は長く眺むるを得たりき。
その如く天人の手より投げられ、
車のうちそとに迷ふ花雲の中より、
橄欖の枝を冠となし、
燃え立つ紅の衣のうへ、
緑の袿(うちき)をまとひ、白き面紗(おもぎぬ)したる
女性の姿こそは現れたれ。

『泣くことなかれ、なほ泣くことなかれ
ああダンテ、泣くは凡ての悩みより
汝にふさはしきことなれども。

我れを眺めよ、我れこそはビアトリスなれ』

――ダンテ『神曲』浄罪界第三十歌――

砂丘の上の家

齋賀琴子

なみより體格の大きな父の後になみより小柄な私は殊更肩を小さくして、かしこまつて坐つて居た玄關からすぐの小ざつぱりした應接間で床には清楚な山水の掛物に水々した水仙の花があしらつてあつた、炭火がカン〳〵燃えて居る火鉢の向ふに幹事のM先生―やがて四十に屆く位の、いかにも品のいゝ、そして世馴れたらしい女先生が滑らかな辯舌でいろ〳〵話をして居られる、と父は高調子の田舍辯でそれに調子を合はせるのだがその無遠慮な胴間聲をハラ〳〵思ひながら私は伏目になつて坐敷の眞中の誰もしかないでゐる暖かさうな虎の毛皮を眺めてゐた。一句每に「はい、はい……」とキツパリ云ふ先生の調子が妙に私には珍らしく際立つて聞えてならなかつた。

「そんなわけでしてな、此子（これ）は東京へ出さんつもりで裁縫（しごと）に通はせてありましたが何分當人が出たがりますのでな……」

と父は吸ひにくそうにしてパツと敷島の烟を吐きながら無造作な口調で云ふ。

「まあ左樣でございましたか、ではさう〳〵お望が適つて、御滿足ですわね」
先生はくづれるやうに焉然して、私の方を覗かれた、そして
「勉強して一番におなりなさいましね、それがお父さんに對して何より御孝行なのですから」
と急に先生らしい威嚴を籠らせた重い聲になつた、私は只顏を赤くしてうつむくきりでなんにも答へなかつた。
あのみるから利口さうなキビ〳〵した東京の人達の間へはいつて、田舍出の、あまりハキ〳〵しない、意生地なしの私が一緒に進んで行けるだらうか！　如何しても田舍の小學校は東京の小學校よりずつと後れて居る、そのうへ私は卒業してから一年もブラ〳〵遊んで暮したのだ、夢にだつて一番になんぞなれやしまい、左樣思ふと胸がドキ〳〵した。
兩親も祖父母も家中の者が不贊成なのを無理にせがんで虛病までつかつて、やう〳〵の事で上京が出來た、そしてもし落第でもしたら何の面目があるだらう！　全體私は何の爲にそんなにまで東京が戀しかつたのか？　東京へさへ行けばすぐに救はれるやうに思ひ込んで居たのか？　私の心は忽ち重苦しい責任の念におさへつけられてしまつた。
やがてM先生につれられて私は寄宿舍へ行き、皆に紹介され、持つて來た行李を檢分された、荷物はなるべく少ない方がいゝので所持品は必要な物だけに限るから一應取調べると云ふ話であつたが切角母がきれいにつめてくれた行李の中を知らない人の手でやみくもにかきまはされる事は尠からず辛かつた、先生は
「はい、はい、これはお襦袢で、お前掛で、よくこんなにお氣が屆いて……」と云ひながら元の通

り行李の蓋をして

「ではこゝがあなたの押入ですよ、あとで當番の方がいろ〳〵敎へて下さいますからね」

と云つて出て行かれた。

其處はさつきの玄關から板の間でつゞいた細長いうす暗い室だつた、右手にはずつと押入があつて左の方は申譯ばかりの細い椽側で庭に向つて居る、庭と云つても實際は洗濯場と物干場だけで、青々した草や木は一本もない、そしておひかぶさるやうな隣家の屋根が日光と空氣の流通を遮つて居る、私は悲しくなつた。

途方に暮れた心細そうな私の樣子がどんなにあはれつぽく見えたであらう、お當番—と云ふのはいろいろ新入生の世話をやく役なのである—の方がそばへ來て何かと話かけてくれる、が持前のはにかみと田舍言葉が氣にかかるのとで私は答へに困んだ。何を問かれても一番簡單な名詞を答へるばかりそして人の氣を惡くさせまいとしてたえず笑顏を見せて居た、お當番のOさんと云ふ人は半紙を小さく幾つにも切つて一々名前を書いて、針箱だのくけ臺だのお箸箱なんぞにまで丁寧にはりつけてくれた。

暫らくすると父が歸るからと云つて向ひに來たので私は玄關まで見送りに行つた、もう日の暮れ暮れで街にはうす寒い北風が吹き荒ぶらしかつた、父の大きなうしろ姿が夕暗の中へ消えてしまふまで私はじつとみつめてゐた、そして云ひやうもない賴りない悲しい思ひに心をかき亂された。

私の入學つたこのK學校は學校とは云ふもの丶その實私塾みたいなもので裁縫が專門の科目だつ

た、家事や修身や國語や習字が一週間に一時間づゝあつてそれらを一口に學科とよんでゐた、校長先生と云ふのはU先生の御嫂さんで質素な、優しいいゝ方だつた、U先生の御母様がまあいはゞ後見役で生徒はみんな「御隱居様々々」とよんで敬意を表して居た、U先生はよく何もかも爲さる、極めて勝氣な腕きゝの方で、學校の内外一人できつてまわして居られた、嚴格な先生を怖がる生徒が多かつた末つ子で我儘に育てられた私にとつては寄宿舍の生活は萬事萬端辛かつた右も左も馴染のない他人の間で今までと打つて變つた規律立つた生活をする事が自ら求めた事ながら私には大抵ではなかつたお當番に當ればいやでも朝早く起きて、バケツに幾杯も／＼水を運んで便所の掃除をしなければならない、凍へしびれる手に息を吹き／＼玄關から門までの庭を掃かなければならないそうしてその仕方が拙いと云つてはし直しをさせられるのだ、そふいふ風の分業になつてゐるいくつものお掃除番がどうかして一日に三つも四つも五つも重なつて來ると本當に情ないと思つた。勞働に馴れない私は人一倍疲れる事がひどかつた、がそんなことの苦しいのは意地一つで我慢もされるたゞたへられない可厭なことは―それは友達の間のはげしい競爭であつた。

この學校では何につけても成績の優劣が標準になつてゐた、生徒に競爭心を起させて勉强させると云ふのが學校の主義であつて、その結果御飯の時に並ふ順序さへも成績できめられてあつた、試驗の成績が發表されるともうその夕御飯の時は席順が變更されると云ふあんばいであつた。

「試驗の時には平常の親友も敵味方の氣になつて競爭するんですよ」

と云つて先生は皆を勵まされた、その結果百人近い生徒の一人でも點數の奴隷でない者はない、他人より一點でも多く獲りたいと云ふ慾ばかりでガツ／＼して寐ても起きても氣を裕さないで居る。親

しげな言葉の裏面にはいつも險しい嫉妬の爪が砥がれてゐる。好んで他人を中傷しやうとする。左樣云ふ暗鬪を見聞きすることが私には何より苦しかつた、そして私は自分だけはその渦卷の中へ決して交るまいと思つた。

一生懸命に競爭して自分が一番になつて、優等賞を貰つて、それが如何だと云ふのだらう皆は一體何のために他人を蹴落してまで自分が進みたいのだらうか、負けたつて勝つたつて結極それが如何なると云ふのだ！ つまらない、と思つて私は一人皆から離れてゐた。

私のこの獨りを守る態度はすべてのことに表はれずに居なかつた、私は口かずをきかなかつた、自然誘はれても友達と一緒に外へ出ることがなかつた、殊更らしい言葉と表情を使つて先生の御機嫌も伺はなかつた、默つて針を動かしてゐた。

觀察の鋭敏なU先生が私のこの振舞を見のがすわけはない。

「どうも少し偏屈でゐらつしやいましてねえ」

と父が樣子を見に來た時例の應接間で話すのを私は思ひがけずぬすみ聞いてしまつた。私はなぜU先生がそれを直接私に云つて下さらないのかと怪しく思つた。

U先生ばかりではない、他の先生も亦友達も私に對して好意を持たなかつた、尠くとも私を氣のしれない變な人だと思つてゐるらしかつた、何よりも默つてゐることが人の心に不安と疑念とを注ぎこむらしかつた。

考へてみると其頃の私はとても群集の中に交れない一本調子の人間―まだ子供だつたのだ、他人との交渉が一も二もなくうるさくて、朝晩挨拶さへもどうかするとたまらないほど厭だつた、厭なのを

我慢して爲るだけの思慮も起らなかつた、他人と云ふものは自分とは思想も感情も全く異にしてゐるのだ。利害關係も違ふのだ、と云ふ事をハッキリ知らなかつた、いはゞ私は世間しらずの我儘な娘だつた。そのくせ朝に曉に孤獨の心の寂しさを感せずに居られないでたえず何かを求めながらそれが何であらうかに思ひ惱んでゐた。

一體私は何のために東京へ出て來たのだらう！「勉强して立派な人になる」そんな勇ましい考へはミヂンも無かつたのぢやないか、私は只自分の周圍が、田舍の萎靡した生活が一概に呪はしかつた、沈滯した空が竟に腐敗してしまふまでアンカンとしてその中に居られないと一氣に思ひつめて、奔馬のやうに驅け出してしまつた、その勢だけは凄じかつたけれど今となつてみれば眞當は何のまとまつた覺悟も目的もあるわけではなかつたのだ、行先のことなんぞ考へても見なかつた、何と云ふ私は愚かな氣違ひやさんだつたであらう！

憧れて來た東京に私を滿足させるやうな、親しみのあるものはなんにも見當らない、現實はあまりといへば冷酷すぎて居る、私の心に話かけてくれるやうな人は一人もない、みんな、お調子のいゝ平面を上つて行く人ばかりだ、こんな中に居て私は如何生長してゆくだらう！　私の習得はふさするお裁縫は果してどれほどのいゝ事を與へてくれるだらう！「女に學問なんぞ要らない、裁縫の學校なら入れてやる」父も母も祖父母も姉までも左樣口を添へて、私を此學校へよこしたのだけれど、こんなに每日〳〵針ばかりいぢつてゐる事がまだ十五やそこらの子供のする事であらうか？　もう二十歲すぎた三十歲近い、お嫁に行つた經驗のある人なんぞと一緒に！　可厭だ、可厭だ、私は如何かしなくつちやならない、私はこんな人たちの中に我慢してゐられない！　私はもつと權威のある何かゞ欲しい、

私の心がひざまづかないで居られぬところの力あるものに逢ひたい。

月日は人を欺くやうにズン〳〵過ぎて行つてしまふ、私は毎日同じやうな事をし、同じやうな事を考へて暮した。

ある日の夕方私は買物にゆくと云つてひとりで出た。實はその日不愉快な事があつて、たまらなかつたので戸外の鮮らしい風に吹かれでもしたら幾らかよくなるかと思つたのであつた。

私は數日前故郷の父へ新約全書を送つて下さいと云つてやつた、その聖書は以前私の家へ厄介になつて居た祖父の方の縁で私に從兄に當るGさんが持つて居たもので、その人が東京へ奉公に來るとき私に殘して行つたものであつた。Gさんのお母さんと云ふのは若い時寡婦になつた不遇な人で熱心なクリスチャンだつたから自然Gさんも感化されて基督のみ名を唱へたり、讃美歌を歌つたりしたのであらう、利發な人でよく何ゝ辨へて居た。勿論Gさんと私は大の仲好しだつた。

私は父がすぐその聖書を送つてよこすものと思ひ込んで居た、自分の願つた事が諾かれぬと云ふ筈はない―が今朝父の返書を讀むが否や切角の私の期待はがらりと外れてしまつたのだ。文面はきはめて簡單でそんな異國の宗敎に近づいてはならぬ本は送らぬと云ふだけに止まつてゐたけれど、私は我しらず手紙を引さいてしまふほど一時に昂奮した。授業中には何が何だか上の空で過した、そしておしまひの鐘が鳴ると逃げ出すやうに出て來たのだ――

歩きながら私の心にはあの黑いクロース製の表紙の大形な手づれのした新約全書ばかりがあつた、家に居た頃人にかくれてちよい〳〵ひろひ讀みをした處々の章句がポツ〳〵心に浮んで來た、左樣だそれには激超な調子で愛と云ふ事が說いてあつた、いろ〳〵のをしへが種々の比喩で語られてあつた、

勿論その言葉の深い意味は私には大方解せなかつたけれど妙に懷かしい思ひにひかされてよく讀んだものであつた。

ブラ〳〵と私は神樂坂の通りへ出た、夕暮れ近い街の兩側に赤い華やかな灯が點つて二つ三つの夜店がもう荷を廣げて居る。美しく化粧した若い女が褄をとつて歩いてゆくのも見える。往來の隅で鬼ごつこをする子供の群もある。そこには暮れてゆく夕暮のしづけさと今や終らんとする一日の一刻に執着する人間の焦燥とが入り交つて動いてゐた。そして薄白いやうな空氣の中に一種の哀調が流れてゐた。

私は坂を昇りきつてどこまでも眞直に寺町の方まで行つた。此處から何處へぬけられると云ふ事もしらず、遲くなることも忘れて、丁度何かに魅せられた人のやうに、無意識に歩いて行つた。肴町の賑やかさはもう後にかすかになつて行手の方はうす暗くさみしそうにみえた。

「オヤおかうちやんぢやありませんか？」

と云はれてぼんやり思ひ沈んでゐた私ははつと驚いて眼をあげたがすぐ前に突立つた男の顔をみて再びびつくりした、それはあの新約全書を家へ殘して行つた從兄のGさんであつた。

「いつから御上京になりました、そして、如何なすつたんですか、今時分お一人で？」

不審そうに覗みかけてきくGさんの姿こそ不思議なものだつた、まるでおちぶれた勞働者さしかみえなかつた、私はまじ〳〵して少し慌てながら

「一寸買物に來ましたの、四月からぢきそこのK學校へね—だけど貴方は如何なすつて、御用があつていらしつたの、こんな方へ」

「否え」

とGさんは口早に云つて

「申上げればいろ〳〵お話があるんです、ですが―あなたは何方からお歸り―こゝを少し行きますとね江戸川へ出ますから、歩きながら少し話しませうなるたけ早く歩いて」

私は何のためらふひまもなくすぐ一緒に歩き出した、Gさんとこゝで會つたことが妙な因緣のやうに思はれたり「その話」と云ふのに好奇心をそゝられもした。

「おこうちやん、實は私は主人の家を逃げ出したのです、左樣です、もふ一週間になります」

私は默つてGさんの顏を視た、刹那につめたい恐怖の念がさつと心を横ぎつた、がすぐに打消したあんなに親しくしてゐたGさんに對して何を私は警戒しやうとするのだ!

「私はとても人に使つて貰へる人間ぢやないのです、なかつたのです。奉公つてものはね、おかうちやん、どんな屈辱でも忍ばなければならないのですよ、どんなもぎだうなことでも主人の云ひつけなら從はなければならない、まあ昔の奴隷同樣なものです、私には如何しても我慢がしきれなかつたそして―」

「だつて貴方は信者ぢやなかつたの―」

私はふと口を滑らしてしまつた、Gさんは驚いたやうに口を閉ぢて私の顏を凝視めたがしばらくして

「おこうちやんあなたあの聖書を御覽になりますか、今でも」

と言葉を改めてきいた。

「家に居た時はよく讀みましたけれど、東京へ來てからはちつとも――あのね私にはよく解らないんです、あの中の敎へが、そしてとても實行するつてわけにはいかないんです、でもあの本を讀んでるとかう夢をみてるやうな、いゝ氣持がするの――」

Gさんは暗い迫つた表情をして默つて歩いて居る、私達は知らない間に川ぶちの櫻の木かげに居た。

「あなたは幸福なんですよ、おかうちやん、あなたにはこの世の中がどんなに間違ひだらけで世間の奴等がどんなろくでなしかつて事もちつとも分りなさらない、世の中には思つたより輕薄ないやな奴が多いのですよ、人の好い奴は何もかも剝ぎ奪られてしまひには骨までしやぶられてしまふ、私はもふ無抵抗主義なんぞ御免だ、敎會へも一切行かないし牧師とも絶交した」

「まあ、ぢやお母さんは――」

「母は相變らず囚はれてゐますさ、三度々々十字を切つてお祈りざんまいにやつてるでせう、――あんな諦めのいゝ人もまあないでせう、私はねこれから復讐にかゝるんです、死んだ父や母やすべて虐げられた人々の可哀想に早くから寡婦になつて貧乏して――」

云ひかけてはつと聲を吞んだ、途端にGさんは何か思ひ出しでもしたやうにつと身を飜へして行かうとする。

「ぢやさよならおかうちやん、」

「まあ如何して、まだ肝心の事を、お話をきかないぢやありませんか、今何處にゐらつしやるの、何をして？」

「――晝間は勞働するんです、夜は公園のベンチの上――」

「だつてだつてなぜ家へ云はないの、私の家へ？」

「私はこれから人の厄介になんぞなりません。命のある限り運命と奮闘するんです、私の目的は一切を破壞するにあるのです、すべてのものを――このきたない、間違ひだらけの世界に火をつけて燒いてしまふんです、ひとりで自分一人の力でそれをやるんです、倒れゝば止むを得ない！　併しきつと誰かゞやり遂げます、一切を破壞して新らしい世界を造ることを、おかうちやん、あなたも安閑としてゐる時ぢやない、勉强なさい、勉强を！　そうしてはたらきなさい、人をあてにしないで、よく忘れないでゐらつしやいあなたはあなたひとりで生れたと云ふ事を！」

止めやうとしたがGさんはもふそこにゐなかつた、暗の中へ吸ひこまれでもしたやうにたちまち見えなくなつてしまつた。

何と云ふ不思議なことだらう！　あれがやつばり以前のGさんなのかしら？　あのみじめな風體（なり）、そしてあの思ひ詰めたやうな態度はげしい言葉つき、偶然あんな處で出逢つて、何か小說にでもありそうな話ではないか、これから今夜何處へ行かうとするのだらう。――私は狐にでもつまゝれたやうな氣がしてしばらく茫然と佇んでゐた。

ふと見ると月のない蒼穹に星がギラ〳〵光つてゐる、その中に一つしづかに蒼白くほゝえむのはあの北斗星だつた、河の水はかすかな諧調を立てゝ暗く緩く流れて行く、ひえ〴〵とした夜氣が何處からか襲つてくる。

一切の破壞！　如何してそんな事が出來るだらう、Gさんこそ夢をみてゐるのだ、そしてひとりで憤慨してゐるのだ！　なぜあんなに世の中を呪ふだらう？　だがそれももつともなやうな氣もする。私

はよくはしらないけれど何でもGさんのお母さんはよつぽど悲慘な運命を持つてゐる人だそうだ、Gさんには兄さんがあつた、そして母子三人のあまりにみじめな生活を見かねて私の祖父が弟のGさんを引取つたのだと云ふ、家に居た頃Gさんはよく勉强したい學校へ行きたい、と云つた、だが私の祖父はよその子にまで學資を出して勉强させるほどの慈善家でもなかつたし、第一學問は無用のものだと云ふ考へが先入になつてるのでGさんのそんな願望は徹頭徹尾あきらめなければならなかつたのだ、そして時計屋へ奉公にやられた、――

ああ、Gさんの一生は如何なつてゆくのだらう！　Gさんばかりではない、すべての人はこの世の中は、どんなに變遷するのだろう。

私はかるい吐息をもらして岸邊の小草を踏みながら、大曲りを曲つて寄宿舍へ歸つた。こんなに遲くなつてどんなに叱られるだらうと云ふことも考へないで。（未完）

頓死

久保田富江

下駄歯入屋のお爺さんは、久しく氣病みのために、暗い汚い借二階の二疊半程の室に埋つて、ブラブラしてゐた。

三十年といふ間、續け樣な同じ貧乏に、碌すつぽな食物も取らず、薄いお爺さんの其日々々稼ぎに甘じて暮して來た人の好い女房は、永い間子といふ者が無くて、唯一人、お爺さんの生活の同伴者であり、弱い亭主の力に賴つて今迄生きて來たが、金が無いため放擲して居た肺病が重つて、今年の春捨てられた犬ころみたいに、くん〳〵泣き乍ら久しくシク〳〵動いて居る內、何うとも仕方が無くなりお爺さんが、枕許に考へ込み水も遣らずに苦しむ有樣を眺めてゐる時に、女房は腐つた魚を干固めたやうになつて、到頭死んで了つた。

お爺さんには友達が無くなつた。六十一歲で齒入屋は獨り者になつちまひ、意地の惡い階下の家族から、毎日室代を催促されて、お互ひに他人の手足をもぎ合つてでも、食べなければ暮して行けぬやうな貧しい中に、お爺さんは茫然考へ込んでゐたが、結局

『矢張り金が無くちや生きられねえわい。』

と思ひ付いて、不圖心を取り直した。

それから、お爺さんは毎日好く仕事に出歩いた。惜しいことをして亡くした女房が忘れられず、死ぬ時迄着てゐた、膝も尻も拔けて縞目も分らなくなつた双子の、而も長い病氣中の種々な女房の匂ひを一杯含んだ着物を、捨てるのが苦しくてお爺さんは自分で着た。丈が低く瘦せて、其上猫脊の齒入屋は、その女房の臭い着物をずる〳〵させ、細帶を締め、すべたな泥まるけな日和下駄を履いて、ガラクタ荷物を雨天にかつぎ、毎日歩けるだけの道を

『下駄齒入れ――』

と呼んで廻つて、幾何かの金を手に入れて來る。

以前よりずつとケチ臭く、乞食に等しい生活をしながら、齒入屋は日々一錢なり二錢なりの貯蓄をしていつた。其の金の蓄へ方を趣向して、齒入屋はボロ〳〵な澁紙を探し出し、端の方から飯粒を以て、一つ〳〵丁寧に張り附ける。それを毎夜一つでも餘計に張り附けることが出來れば、どんなに樂しみであるか知れなかつた。

どんなに仲の良かつた女房とは云へ、生きてゐる間は矢張り、人間らしく不快な想ひもしたし。又お互ひに相當の喜びも分け合ひするから、そこに感情の交錯といふものが起きたが、今は本當にそれこそ、自分の心を語る者が無い身に取つて、何より自己を生かしてくれる金が頼りになつて來た。蓄まれば蓄まる程、お爺さんは金に魂を打込み、惚れ拔いて、俺は金を抱いて死ぬだらうと考へるやうになつた。己れを生かすために金を蓄め、また金のために自分が生きてゐるのだと思つた。お爺さんの感情は只一途、金に向つて若々しく震へる。金以外には、お爺さんの頭が何方にも向かぬ。目が何

所をも見ない。神經が散亂しずに金のみへ集つてゐる。齒入屋は此點に於て最も幸福な人間であつた。

或一日、お爺さんは例の通り、よぼ〳〵と荷をかついで町を歩いた。何時に無く寒い日であつた。灰色した初冬の空は殊更どんよりとし、薄日は地を舐めるやうに這ひつゝあつたが、それもやがてチリチリしながら宇宙に消えて行き、雨がみぞれに成りさうな冷めたい風が、頻りと其邊を吹きまわる。

『げ、げたあ、齒入れ――。』

只さへ吃り勝のお爺さんの聲が、何かに衝突り〳〵するやうに、蹣跚して、見て居ないでも大抵其の容子が、察しられるやうであつた。

ガラクタな荷箱は、お爺さんの前後で、ゴツト〳〵と搖れ、同じやうに齒入屋は首をガク〳〵首肯せて、丸くした脊の下で、また腰を一つ曲げ、總じて、前へ〳〵と突出る樣に歩く割合に、足は遲々として進まぬ。

お爺さんは絶えず考へ事をしてゐるのだ。強い疾風が俄に眞向に吹きつけ、雨が泥ぢつて顏を撲つたのも、齒入屋は何事だと呟くばかりだつた。

『弱つたな。』とお爺さんは吃つて『まだ今朝から九錢しか稼げねえ。たつた吾妻下駄の入れ換えが一足半ぢや無えか。まあこれで今日は終ひとなると、俺あどうする? 足りねえだらう?! 五錢の室賃拂つて、まさか四錢ぢや今日生きられねえよ。するてえと、あの張りつけた奴をはがさにやならねえ。俺あ厭だよ。あれはがすのは、この爪はがすより辛いからな。と、何だ。あと十一錢今日中に稼がざなんねえな。すりや一錢玉が三個よ。こうずらりと並べて張り附けられるな。そんだらう? あと十一錢かい。……』

齒入屋は思ひ出して荷の音をさせ、

『げ、げたあ、齒入れ――。』と聲を張り上げた。魯鈍な聲は四方へ延びずに、直ぐまた自分の口の中に立ち止つて了ふ。

『あれはもう二個張り詰めれば一杯だな。そしたら俺あ今度他の澁紙を出して來てよ、それに五錢玉を張ることにするんだな。へッ、堪らねえだらう。俺あ錢の蒲團を敷いて寢るやうになるよ。それで、五錢玉を張るやうになつたら、と、俺あ今よりもつと稼ぐだらう。そしてもつて食物を惜しむだらう。だが待てよ。――俺あ今俺の働きで物を食つてゐるんだな。一番これに錢が掛るんだな。――馬鹿らしいこつた。……だが食はずにや生きてられねえ。矢張り俺が稼いで食はにやあなんねえか。ハヽヽヽ、馬鹿だなあ俺は……。何故こんなことを考へたらう。俺が稼がないで、俺が食つて行かれるか……。いやさうぢやない。誰が食はしてくれると考へるには當らねえんだ。出來ねえこと無いさ。それ斯うするんだ。お得意の臺所か、仕事に有付いた初めての家の臺所かで、若しお宅におこげは御座えませんかしら？と賴んで見るんだな。其家に無いにした所で構やあしない。實は今日は稼ぎが無えんで、飯粒一つ口に入れません。申兼ねましたが……つてふと、やらないよなんて素氣無く斷る道理も無からう。兎に角俺あ贅澤なんだよ。こんなケチな自分の稼ぎで、米の飯食はうなんて間違つてるもの。そんな身分ぢや無えもの、ね。』

お爺さんは頻りと吃り〳〵、自分の好い考へを獨語つて首肯きながら、夢中で歩いて居たが、風雨に曝らされて感冒を引いたか、身震ひが出て思はずくしやみをした。

齒入れ屋は立止り、荷を其場に置いて、右手で鼻を横つちよにこすつてから目叩きしつゝ腰にはさ

んだ眞黑な手拭を取つた。今更のやうに空を見上げ雨の降つてゐるのに氣が付いて、其の手拭ひをポンと廣げ、胡麻鹽の茫々頭に被つて、頤でぐいと結んで。其うした一仕業が濟むと同時に、お爺さんは尙も續けて此の問題を深く考へる。

暫くして齒入屋はぞく／＼する程嬉しくなつて來た。もうぢつと落ち付いて歩いて居ることが出來ない程になつた。荷物を打擲つて踊つて行きたいやうに、自分の考へることがすべて思ふ通りになりさうな氣がする。

『有難え。明日から飯を貰つて食ふんだな。俺の金は室代だけ拂つて皆殘る。三ケ月で一杯になる澁紙へ、五錢玉がずらりと同じ期間で張れるわい。一足飛びに五倍も餘計に蓄められるんだ。……でと、おや／＼今日はまだ九錢しら稼いでねえ。これぢやいけねえ。やれ／＼、俺は怠けたぞい。』

お爺さんは驚いて首を上げた。こまかい雨が一層密かに冷めたく降り續いて居る。家々の軒場は暗く、沈滯して、夕暮れにはまだ間もあるが、四邊は寂しい。齒入屋は狼狽した。こりやいかんと思つて

『げ、げたあ、齒入れ――。』

近い未來の理想と、その理想の恐らく極く好いことだとの考へのために、お爺さんの呼び聲は慌たゞしく、重い空氣に衝突つて震へる。ドキ／＼した呼吸が、俄に濡れた風を肺臟に引入れて、お爺さんはゴホン／＼と咳き初めた。

『……げ、げたあ、ゴホン―― 齒入れ、ゴホン――』

『畜生！ 自烈度え。ゴホン／＼。』

不思議とお爺さんの咳は何時迄も止らぬ。彼は間誤付き口惜しがつて「エ、エ、」と吃り、涙をこぼしながら一生懸命に力んで、

『げ、げたあつ齒入れつ――』

と喚鳴つた。齒入屋の顔は爲に眞赧になつた。

『――齒入屋さあん。御用だよ。』

女の聲が何所かで彼を呼ぶ。お爺さんは恟つとして「ヘッ」と周章へ、聲の方を見返へると、肥つた頬邊の赤いお多福が、足駄を二足ブラ下げて、中位の家の軒場に立つてゐる。

『へえ、有難うござい……。』

彼は咳を漸つと抑えつけて、急いで女の方に驅け寄つた。足駄二足、といふ打算は素早くお爺さんの幸福な考へを招ぶ。

『へえ、有難うござい。』

お爺さんは荷を置き、腰を屈して手を出す。

『雨が降るつてふのに、もう一時間も經つと子供達が出かけるんだからね、急いでやつておくれよ。これ皆入れ換えだよ。出來るかね。お前さん。』

『よろしう御座います。、、、ほう齒ですな。二足共。出來ますとも……處でなお女中さん。此所は雨が降ります。お軒下ぢや私みたいな汚い奴が居て外見ない。お勝手の方へでも……な。へエ。』

睨めるやうに膨れた顔して見てゐた女は、ウンと云つて大風に裏口へ廻つた。一尺ばかり庇の突出た下の溝板を指して

『此所が好からう。』

と女は云ひながら、臺所の戸を開け中に入つて、顏だけ戸外に出した。

『今日らなんかお前さんたち景氣が好いんだらう？』

女は威張つて訊く。齒入屋は戸を後にして其所にうづくまり、道具を出しかけながら

『駄目ですよ。』

と云つた。そして

『ところでな……』と續ける。『濟みませんがね。誠に申兼ねましたがね。』

彼は両手を揉み合せエヘ、エヘ、と媚笑ひながら、體をねじ向けて首を下げた。

『何さ？』と女はブツキラ棒だ。

齒入屋は丹田の邊がぐらついて、舌がもつれる。

『その、申兼ねましたがね、お宅に、おこげは無えでせうか？』

人ずれのしたお多福下女は吃驚して、この突飛な文句に木兎みたいな目を見張つてゐたが、やがて馬鹿にしてゐるよ、と云はぬばかりに笑ひ出した。

『ありやあどうするの？』

お爺さんはこう云はれて悶々しくなり。

『今朝から實は物も食べねえんですよ。腐つた飯でも宜うがす。一杯恵んでやつて下さいまし。』

『今頃飯が腐るかいねえ。冗談ぢやないよ。——だが一寸お待ちよ……。』

女はガタ〳〵と引込み、やがて內證で戸棚の隅に隱してをいた新聞包みを取出して來た。

彼女は今朝ウンとおこげを拵へたのを、先刻どうせうと惑つてゐたところだつたので、好い鹽梅に始末が出來ると思つたのである。

齒入屋に取つては、眞實計算通り、豫期以上、恐らく天祐、神様のお助けであつた。

『默つといで……。』

女は放り出すやうに包みを齒入屋に渡して、ピシヤリと戸を閉め

『早くしておくれよ齒入屋さん。』

『ウ、ヘエ、有難う御座えます。』

彼は下女を拜み、喜び勇んで新聞紙の端を、ちよいと抓んで覗き込み、しこたま有るおこげを目を細くして眺め、荷箱の中にゆる〳〵と仕舞込んだ。

それから齒入屋は、兩手を揉み〳〵道具を擴げて仕事に取掛つた。彼は一時間の餘も有頂天になつて考へ、咽喉を鳴らし、一人で笑つたり呟いたりして、二足の齒入れを漸つと仕終へた。

『いくらだね。』

と先刻の女にきかれた時、彼は

『二、二、二十錢頂きますつ。』

と夢中で答へた。女は呆れて彼を見詰めたが、直ぐ失笑して了つた。

『二、二、二十錢かい？』

女は奧へ行き大聲でゲラ〳〵云ひながら五錢白銅を四つ持つて來た、お爺さんの昂奮して差し出す震へた掌に載せた。

『ど、どうも有難う御座い。ど、どうも有難う……。』

『お前さん……』女は小聲になつて『毎日でもね、廻つて來られたら裏口に來ておくれよ。何時でもお飯を上げるからよ。』

お爺さんは泣きたい程だつた。

『誠に、有難う御座います。お、おかげで助かります。有難う御座います。へエー。』

彼は感情が突詰めて、涙を流し水鼻をすゝり上げ、身震ひを初めた。

齒入屋は殆ど逆せ上つて、其所から傍目も觸らずに、一散に家路をさして戻つて行く。日は益々勢無く薄れ、雨は頻りと密に降り、風は寒い、人足も稀れで、町の家並も影は黒く、濃い灰色の空に、道を忘れた呆報鳥が一羽、バタ／＼とお爺さんの頭上を「カア」とかすれ聲で鳴いて飛んで行く。路端の枯れた立木の梢も濡れて、カチ／＼と有るか無しに風で鳴る。

齒入屋の道具も矢張りゴツト／＼と音がする。彼は突のめるやうな容子をして、汚い長屋の、隅つこの冷めたい二階に歸つた。

何時の世に掃除といふことをしたか、と彼等の住家に疑ふも愚だ。朽ちかけた疊の表を、試みに母指でちよつと押して見よ。ジク／＼と腐れた肉か膿汁でも出さうな。又それが此の世の空氣に觸れたことも無く、蒸れて／＼蒸れ切つた臭氣が、小さい範圍だけにより多く充實してゐる。火の氣が無い故、すべてが固りついたやうになつてはゐるが、萬一烈しい日光の直射でも受けたら、埋まつてゐる汚なさと臭さとは、如何に四方を苦しめ惱ませるか。

壁はげつそりと現はれ、蜘蛛は巣を所嫌はず張り、なめくじはぬら／＼と這ずり、其の跡がカラカ

ラと光つてゐる。低い天井からは五六寸もすゝがぶら下つて、室の一方には方々から綿が顔出したボロ蒲團が敷いて有る。これは女房が死んで、屍を只どうにか始末したあとの拔殼であつて、お爺さんは眠ければ此の上にゴロリと横たわるばかり、彼には何の汚なさも感じなければ、夏冬押通し何の不自由さも無い。右手の小さい窓ぎわに炮烙が載せられ、灰とゴトクが眞中に納まつてゐる。お爺さんは此の炮烙の上で、物を煮燒する。

齒入屋は荷を隅の方に片づけ、新聞包みと今日の賃金だけを、已れの目の前に取出した。先づこげた飯を一摑み貪り食つて腹を作つてから殘りは明日の代と大切に藏ひ、次に稼いで來た二十九錢の財産を調べ初める。何度勘定しても二十九錢は、お爺さんの手でチャラ〳〵といふ。

『有難え。』

お爺さんはホク〳〵して夢中になつて了ふ。だが此のうちからどうでも五錢の室代を引かねばならぬ彼は右手に五錢を取つて、あと左の掌に並べて、ぢつと考へ込む。それから仕事の材料が足りなくなつたのも氣が着いた。其所から假に十錢を引いてみる。十四錢殘る。これだけ澁紙に張ることが出來る。

『なあ、何時もなら赤い奴が精々二つか三つなんだぜ。これだけ引いちまつても、まだ十四錢殘るんだ。だからよ。自分の錢で飯食ふつてなあ違ふつてんだ。どれ階下へ遣つて來ようかい。』

お爺さんは五錢の室代を拂ふために、階下に下りたが直ぐとまた上つて來て、今度は例の澁紙を蒲團の下から取り出した。澁紙は凡そ疊半分を少し大きくした位であつて。もう大抵それには一錢だらが張られて、突張り返つてゐる。彼は獨りでニタ〳〵笑つた。彼は嬉しいのである。これを見れば、

もう彼から四方のすべてが沒交渉になつて了ふのである。これに頭を使つてゐる時、お爺さんは樂園(パラダイス)に生きてゐるも同じなのだ。何も考へぬ。他が眞暗になつて、其點だけ明るく、彼の眼を眩まさんばかりの勢ひを以て、お爺さんの心を引つける。

お爺さんは何も彼も忘れ果て、滅茶苦茶になつて無暗に種々のことを呟く。飯粒は手許の小さい板の上で練られ、錢は一つ一つ表を見せて澁紙に張られて行く。危かしい階段口(はしご)を脊後にひかへ、勿體ない錢を踏まんやうにとお爺さんはそつとしやがむ。足先に力が入つて軀の方は重みで搖れる。

『こうつと……今日は白銅が多かつたんだからな、赤ばかりずらつと並べるわけにいかねえ。赤い所へ白いのを一つばつか入れたらよくねえな。こうつと……。』

幾度も配合よく並べて見たが、白銅一つがどうも調和が取れない。お爺さんは首をひねり、一生懸命に考へて腕を組む。

一つ二つ三つ四つ、五つ六つ七つ……

そうしてお爺さんは初めから並べた數を勘定(かぞ)へてみた。五錢一個の遣場(やりば)に困つて、お爺さんは悉皆疲れて了つた。

『これあ何だ。また明日のことだわい。別にしとけい。』

あきらめて、彼は白銅だけを張らずに置くことにした。

『嬉しいな。』と子供のやうに有頂天に喜んで

『俺あなお前ほど可愛い物は無えと思つてる。見ねえ。人間は物を食はなきあ生きてゐられねえがな、お前たちは食はずに生きてゐられるんだ。俺あ女房は死んだけど、あれだつて食つて生きてた人

間なんだ。俺が稼がなきあ彼だつて矢張り食へなかつたんだよ。俺を苦しめたものだつたぜ。だが彼奴は死んぢやつたんだ。死んだ當座は俺だつて氣が拔けたさ。女房だからなあ。俺あ彼奴も可愛がつてゐたんだが、死んでくれた方が有難い位なんだ。彼奴ら、それ、食はずにあ生きてられねえ人間だらう。俺の稼ぎを的にして、俺に食はして貰つてた人間だからな。俺を苦しめて居やがつたんだよ。彼奴は……。それで死んだから好いやうなものゝ、今だに生きて呉れてゝ見な。俺あお前達をこうして可愛がることも出來なかつたらうよ。世の中の食つぶしは一人でも餘計に死んだ方が好い。きつとお前たちを皆あの女房に食はせちまつたかも知れないからな。ところで、お前たちは、俺には何程居てくれても好い物なんだ。お前たちは金だらう。俺あ此の金のために働いてるんだ。俺あ食物なんか欲しく無え、お前達の顏を澤山見てゐられゝば死んでも惜しく無えよ。食ふ物食はずにお前を蓄めようつてんだよ。お前達は居てくれても好い物なんだからな、澤山俺の所に入つて來てくれよ。俺あ金に食はれて死んでも構はねえが、お前達を食ひたく無え。ましてや、お前達を女房のやうに殺しちまひたかあ無いからなあ。女房よりどんなにお前達の方が可愛いか知らねえ。俺自身の軀より大切だと思つてゐるんだ。まだ死んだことは無えけど金のために死ぬんなら、何の恨みも殘るめえと思ふ。何ならお前たちと一緒に死に度えな。——何だお前たちは死なれなかつたげな。アハヽヽ。俺あ時々馬鹿なことを考へて仕方が無えよ。お前たちが本當に死ねる時があつたら、俺も其の時死に度え位だお前たちと一緒に、矢張り何時迄も生きて居度いぜ。眞實よ、お前たちが一つでも餘計に增へてつてくれゝば、俺の壽命も長引くことだ。俺あ今日ほど氣持の快い日は無えんだもの。嬉しくつてね……おい、金よ。お前達はまあ何て、可愛い奴だらう。默つて物も食はずに生きてゐる。羨やましい

なあ。……』

お爺さんは頻りと金に向つて獨語ち、自分の孤獨の淋しさも打忘れ、涙をこぼし鼻をすゝり上げて陶然とした。如何程見惚れて居ても見飽かず、どんなにお爺さんは金に心醉してゐるのか。彼の前には澁紙に張り着けられた銅貨がずらりと冷めたく並び、五錢玉がほうの木を買ふ資本と共に三つ置かれ飯粒の糠つたのがぽつちり手許に殘つてゐる。すべては動かず其儘なのである。只一人お爺さんだけが呟き、頭を熱しさせて腰をフラ／＼動かしてゐる。お爺さんは先刻吸ひ込んだ空氣が、胸の中で暖まつてムヅ／＼咽喉元にこみ上げて來るのを知つた。それをぢつと堪えて喋つてゐたのだ。

『また明日もよ……。』

最後にお爺さんは斯う呟いて、一切を片付けやうと立上つた。

とたんに力の込つた咳が續け樣に出初め、頭は割れるやうに響いて、逆せ上つた彼の足は、久しくしやがんでゐたために痺れてよろめき、重い腰は彼の軀を諸に後方へ引いた。お爺さんの汚い足裏が天井を向いたと思ふ間もなく彼は慘目な容子で階段を逆さに轉げ落ち、家中を破毀するやうな音をさせて、階下の土間にごつと倒れた。其の軀の上に、階下の天井のすゝもほこりも同時に落ちてぶつかゝる。

意地の惡い階下の家族の者共が、口々に罵りながらお爺さんの手を引摺つて、起さうとした時に、四肢をしやつちよこ張らせたお爺さんは、『ウム』と云つた限り白い眼を出して、大せいの者の顏を見た、彼等は驚いて手を放す。お爺さんはまたどたんと轉倒つた。

それで、お爺さんは、腦を打ち舌を嚙んで忽ち死んで了つた。呆氣もなく、彼の一生はこれでお終

ひになつた。

お爺さんの遺産を、階下（した）の者共が好い樣にして、どうやら始末をつけ終つた頃、晩になると疊を指して泣いてゐるお爺さんの、哀れな後姿を暗い階段の上に見ると云ふて、彼等一家はいづれへか逃げて行つた。

其空家に、お爺さんの執念は殘つて、毎夜二階の疊を指して泣き續ける。

從妹

生田花世

或る冷たい朝秋海棠の咲いてゐる小さな庭に入つて來た髭の深い年老つた配達夫に大きな濁つた聲で名を呼ばれて、急いで出て見ると私の手には電報が渡された。發作的にわなわなとする指でまだ糊も乾いてゐない二つ折の柔かなばつたりした感じの傳はる電報紙を開いて、一目で其れを解すると私の頭腦は一時に茫然となり立つても居ても居られないやうな或る恐しい力に對して凝然としてゐるのが大變腹立たしいやうな苦しい苦しい切ない氣持となり、大地に胸を密接けてわつと慟哭でもしさうに昂奮して、私は小さな部屋を唯ぐるぐると幾度も廻つて歩いた。

『今朝死んだつて?……今朝だつて?……』

私はぶつぶつと云ひ續けた。

涙はまだ流れないのである。唯大きい焦燥と絶望とが獨樂のやうに私を掻き廻す。そして黑く苦い苦い感じが……不可抗力を以て刻々に私達の周圍の人々――私達の血肉の優しい者秀れた者愛らしい者、美しい者、生きて居らねばならない者――を遠慮會釋もなく掻つ攫つてゆく『死』の黑く苦い苦い感じが私の胸を襲つてすつかり私を混亂させて來た。

『あんな美しい娘を何故奪つて了ふのだ。こんな醜い私は死んでもいゝのだ。あの婚禮を濟ましたばかりの可愛い花嫁を殺さねばならぬ譯はない！』

かう苦情を呟いて私はべつたりと崩れるやうに部屋の眞中に坐つて泣き始めた。

電報をもう一度見た。まだ誰から打電されたものであつたかをも知らなかつた。見ると打電した人の名は唯「サ」としるされてゐる。そして私の住所の番地だけは合つてゐたが、町の名は以前居た隣の町名となつてゐたのを知ると、これを郵便局で認めた時の才輔のすつかり狼狽した心が窺はれるではないか。

私の弟の才輔よりか一つ下だつた從妹の鶴子は去年の秋店の若い者と結婚したが二月目からぶらぶら病み出して今年は春からこの秋までずつと病みつづけてゐたのである。常からも線の纖細やかなすんなりとした肌目のこまかな髮の黑い弱々しい町娘であつたので、病めば一層惱ましげに痛々しく、美しさも增してゐたらうと思はれる。もうお粥しかいたゞかなくなり、動かすと痛いといふので寢たままとなつてゐるので本當に氣の毒ですと、今其處に厄介になつてゐる私達の三番目の弟の六藏がつひ五六日前の手紙で云つて來た。六藏の前にやはり叔父の家で半年ばかりも店の用をしてゐた才輔は叔父の娘の鶴子の美しい姿を其の後續いて其の心に度々描いてゐたに相違ない。戀とは云はずとも或る淡い淡い懷かしい快感が彼の胸に湧かなかつたものとは云へないのだ。

『あの子はきつときつと失望したに相違ないあの美しいお鶴さんを思つたかも知れないものを：』

私は臥床で眼を覺まして本を讀んでゐる精夫に相談をしなければならないと思つた。

『ねえ、私の從妹が今朝死亡りました相で、才輔からこの電報をよこしましたの、お鶴さんと云つ

てそれはそれは美しい可愛いひとでしたのに……』

私達はまだそれまで此の従妹の話をしたことはなかつたのである。精夫は顔をもたげて電報を開いて見た。

『幾年だつたのか?』

『才輔よりか一つ下の今年二十五でしたらう、ほんに美しかつた人なのに……』

『二十五? 僕と同い年だね。二十五位で死ぬ程良い事はないなあ。僕ももう今年で死ねばいいのだが……』

『まあ貴方にはもう少し生きて貰ひませうね、お鶴さんは、あなた。去年の秋に結婚したばかりですよ。その旦那は店へ子供の時から入つて十何年辛抱をした人で、夏吉と云ふ人。戀が叶つてどんなに嬉しかつたでせうのに……』

私の眼にはぐつと涙が漲つて、眼の前が曇つて了つた。私の眼には神戸のあの海岸に近い町の叔父の家の古舗らしい茶の間で、どうかしたはづみに店とで、夏吉の眼と、お鶴さんの眼とが火のやうに輝いたであらう事を心に描いたり、赤い鹿の子の大丸髷にコートを着た上品な如才のないすんなりとしたお鶴さんと、實直な顔をした夏吉とが、船にのつて淡路の夏吉の里家に行つたであらうやうな事までも次々に思ひ描いた。

『何といふ風に電報を打てばようございませうね』

『さあ』

『フコウヲカナシム はどうでせう』

『いいよ』

『では急いで打つて來ますわ。』

私は直ぐに家を出た。そして郵便局で、字數を指で數へながら頼信紙に「フコウカナシム」と書いて外に出た。

家に歸る道々、通りの高みからは西の方の箱根方角が眼で定められるのである。それよりもずつと遠い神戸の或る一軒の家は不幸に沈んで、家内中の涙がほろほろと溢れてゐるであらう。殊に叔父は妻をなくしてから後に殘つた子供達、殊にもう家政の事には、其の母親よりも聰かつた鶴子をどんなに愛してゐたか知れないのである。嫁にやる事を惜しんで、分家としたのでもそれだからであつた。また短い契りを結んだ夏吉の悲しみはどうであらう。四つ違ひの冬子はもうそろそろ姉の代りに家政をきりまはすだけの甲斐々々しい娘になつてゐる。冬子は姉を本當に敬つて何にまれ慣れ親しんでゐた。病の床の世話はみんな冬子がひとりでしたのである。泣いても泣いても彼女の涙は盡きないのであらう。幼い六藏も幼い従妹達と二階の暗い片隅で深い心は知らぬ乍らも鼻を鳴らしてゐるであらう、ああ。若い美しい女の死程胸を痛める事があらうか。

『死』はどうしても彼女に來た。それは私に分らない。またそれが誰に分らうかこんな悲しい『死』に對して涙の外に。其れ以上一歩を踏み入れてどんなにか考へたい。だがそれが私に出來ない。私には其の力がない、それだのに『死』はいつも歴然と私の前に黑く横はる。

私はお鶴さんに三度逢つた事がある。其の中でも一番深く胸に殘つてゐるのは今からもう七年もの昔の事ではあるが、それが世の無常の最も鮮かな記憶だつたと思ふ。

其頃國で小學校の女教師をしてゐた私は始めて海の上を船に乘つたり、他國といふものの綠の山水色の河を見て、自分の國と同じやうなのに安心をしたりした。夏の日の明かな波の果てに褐色の島が橫はり、礫のやうな白い水鳥が群れ飛ぶ瀨戶內海をすすんでゆくと大阪の大きい港が打展いて私達を迎へた。

高野山で七日間の講習を終了し奈良の名所を巡り、歸路は大阪で、同伴の女教師と別々になつて私は、神戶驛で下車して、俥をやつて叔父の住む町に近づいていつた。

叔父の家は私にとり、また私の母、私の祖母、出入りの男女等にとつては、都會の象徵として何十年來頭にしみこんで來た蜃氣樓であつた。華かな美しい處は叔父の住む都であり、叔父の家は幸福なまるで理想的な生活のやうに私の胸に浸み入り、叔父の娘の冬子と、長男の實とが私の家で育てられる事となつて、叔父の家から二人の着物を送つて來るごとに其の美しい着物によつて私にどんなにか叔父のすむ土地を憧憬せしめたであらう。殊に出入りの小母等が京見物のかへりに寄つて、叔父の家で見たもの、聞いたもの、善美を語り、實や、冬子の姉の鶴子がどんなにか美しく、また賢く、幸福であり、優しかつたかを天女のやうに崇めてもの語る時、私の眼はどんなに怪しく潤ほつたであらうお鶴さんはお琴に堪能だと小母は云つた。私はお琴といふものは叔父の家から私の祖母のために私達が讀んであげるやうにと送つてくれる新聞の繪で見るより外は見る事もなかつたのである。小母はまたお鶴さんに友禪縮緬の振袖が三重ねもあり、厚板の帶が五本もあるやうな事を芝居のお女形の事でも話するやうに嘆息しながら話したりした。美しいお鶴さんのゐる叔父の家に私は俥の走る每に近づいて、やがて廣い通の左側の丸竹と軒燈の上つた家の前まで來ると靜かに梶棒は控えられた。

叔父の家は舊家らしいがつしりとした無暗にたゞ廣くないかはり落付いた氣持のする靜かな家であつた。店の小僧、——店は廻漕店である——は私を客だと思つたか、私が、姓名を告げると、事務所と記したガラスの扉をあけて寫眞で見知りの叔父が出て來て。

『おゝ、お前が來た。よう來てくれたなあ。さあ、お出で！　お出で！　勝手の方へ行つてくれ』

そしてまた

『お鶴、お冬、久世さんが來たぞ』

と云つた。

此の時分叔母はもう產の爲に世を去つて三年目にもなつてゐた。實も冬子も此方に歸つてゐたのである。

叔父の言葉に冬子も其の下の二人の女の子もお鶴も出て來て私を迎へてくれた。三つになる武雄といふ男の子を抱いて乳母のお由も出て來て皆んなで大變な珍客のやうに喜んでくれた。

『ようお出で。始終冬さんや實さんの話で、聞いてまんので、お目にかゝりとうおました』

と鶴子は團扇で風を送つてくれたり、其の白い頬に片靨を浮べて、旅の疲れを慰めてくれたりしたが多いのにお鶴さんは美しくてなよやかであり、無邪氣な人であつた。其の時はたしか十八歲であつたと思ふ。

本當に美人だと私は思つてお鶴さんを見惚れた。それに美しくつても强すぎて好い氣持のしない人

夕方葉書を買はうと二階を降りて下駄を穿いてゐると目ざとく見てお鶴さんは寄つて來て人の心持を汲々と酌み取つて囁くやうな低聲で

『あの、何處へお出で！』
『葉書をと思ひまして……』
『あらッ又さんにそ云ふとようおますに……』
『でも其處でしたら私一寸行つてまゐります』
『さうだつか……』
そして私をにこやかに笑顔で送つてくれた。
夜になると湯上りの薄化粧をしたお鶴さんは紺の絞の浴衣に着かへてとん〳〵と二階に來て、私を親しげにのぞいて
『あの、お寢むおまへんでしたら、大佛さんまで遊びに行つてまゐりまへうか。みんなで』
『近い處？』
『えー―え、近うおまんの』
と云つてにつこりと小首をかしげて訊ねる。それは可愛らしい其の眼だつた！　私は喜んで皆んなと一緒に出て近所の大佛樣の觀商場の中をぞろ〳〵と歩いた。お鶴さんはお由の春の武雄を若い母親のするやうに振り返り振り返り振り返り手をかざして機嫌を取つた。きやつきやつと踊り上つて子供は笑つた
私は二階の十疊で寢た。立派な蒲團を其の白い手で敷いてくれて、お鶴さんは便所の時の用意にと雪洞まで枕元にそろへて、
『よーうお休み』
とにつこりして云つてくれた。

朝起きて見ると夏の空は碧色に晴れて、海からの朝風が涼しかつた。髮を直し、下に降りて顏を洗ひ、朝飯をすまして二階に上ると簞笥の前の大鏡臺の前でお鶴さんは冬子の髮を手際よく上げてゐた私が國でみてゐた頃はまだ十位の利かぬ氣の少女であつた冬子は今はめつきり娘々しくなり、姉とは違つて骨のしつかりした、色の淺黑い、眉の濃い、凛然とした容貌の女となつてゆかうとしてゐた油つ氣のない髮はたぼの小さく出た初々した束髮に上げられて、其の頭中一杯の髷は髮の多いのを示してゐた。

『お世話におました』

と冬子は鏡をにつこりと見て小腰を上げ、周圍の髮の毛を手で拾つて、丸めながら私の方にも笑顏を見せながら、若い娘のよく見せるあの一寸澄ますやうな表情をして座をのいた。次には鶴子がその髮をほぐして櫛を入れはじめた。黑くて細い毛は艶々と流水のやうに光るのである。

『良いお髮ですわね』

『いゝえ、ちつとも良うあらしまへん。弱くて厭な厭な毛。あんたはん。なかなか黑うて澤山の毛です事な。』

『ほんとに久世さんは澤山の毛。』と冬子までも口を揃えて云つた。そんな風な事の云はれる子ではなかつたが、鶴子は前髮を結んでほつと美しい吐息をして、

『あの、今日なか〳〵良い日だすさかい。お疲れしまへんだつたら皆んなとお出でしまへんか、舞子や明石に行かうと思ひますの、舞子？　お出での事おまして？』

『いゝえ』

『電車で直ぐ行かれまんの。なか／＼ようおまつせ』
『さうださうでございますのね』
私は喜んで行く事とした。
二人の女の子は紅い洋傘をさし、冬子は水色、お鶴さんは濃い紫、乳母のお由は鼠、私は木綿の黒の洋傘をさし、三つになる武雄は抱かれたり、負ぶはれたり、またお鶴さんと乳母とに兩手を取られてよちよちしながら歩いた。電車は二十數分の後に、六人を舞子公園に運んだ。
松林の中の砂地をざくざくと歩いてゆくと夏の光は白露のやうに皆んなの肩に落ちた。停車場には眞紅に鮮かな夾竹桃の花が開いてゐた。貝殼をさげたり、松露の苞を下げたりして若い夫婦や、學生等が通つた。海水浴場には隨分の人が出てゐた。中には女で蓬莱に泳いでゐるものもあつた。二人の女の子と冬子とは水際に上げられてゐる小さな貝殼を探り歩いた。お鶴さんは洗ひ髮の鬢を鳥の羽根のやうに磯風に吹き廣げられながら、武雄を負つて立つお由の頭上に洋傘をさしかけて、默つて其の美しい瞳を水平線の方の黑點のやうに浮ぶ汽船にそゝいでゐた。
『あの、あのお船は阿波へ行くお船でおまへんか。貴女はんが乘つてお歸りになる方？』
と云つて蹲る私を見て云つた。
『私も一度は是非お國へ行こおもうとりますの。なか／＼ようおますさうね。冬さんなんか幸福ですわ。お國で大きうなつて……』
『でも私にはちつとも好うありませんの。こんな賑かな所に生れたらよかつたのにと思ひます』
『さうだつか。けれどもちつともようおまへんわ。第一身體のためにようないし、靜かでないし、

お國がほんさうにようおよつせ』

とお由も青白い陰氣な其顔を振り向けていつた。

青い波は折り返し折り返し、ばさりばさりと足許に這ひ寄つた。潮は段々に滿ちて來るのであつた。

公園に引返して松林の中で皆んなは鬼ごつこをした。幼い男の兒の眼には松の幹につかまつて出したり引つこめたりする乳母のお由や、姉のお鶴の白い顔がちら〳〵した。よろ〳〵と砂地に轉げて喜んで笑つたりした。三人の女の子はぶらんこに乘つた。武雄がそれに乘ると云ひ出した時には、お由が乘せて、横から靜かにお鶴さんが綱を動かした。女の子達は、松の木から松の木へ一本足で飛びごつこをしてゐた。

又明石驛まで電車に乘つて、草の小徑を通つて人丸山に上つてゆく頃には女の子達はもう疲れてゐた。一人は冬子に手を引かれ、末の一人はお鶴さんに手を引かれて歩いた。山門の傍の見晴らしのよい茶店の赤毛布をしいた床几の上に六人は座り、氷あづきを註文して、それを待ちながら、海の藍色の遠望を見とれてゐた。女の子供ももう眼をとろんこに据えて默つて大人のするやうにしてゐた。武雄は乳母の膝ですや〳〵と眠つて了つた。乳母とお鶴さんとは對ひ合つて、

『ほう! さうだつか。私ちつとも知りまへんだつたが。』

『そんな事あらしまへん』

『あらしまへんと私も云ひましたんぢや』

『ほんまにかなひまへんわ』

『…………』

などゝ私に分らない話をいつまでも話しつゞけてゐた。氷あづきはお旨しかつた。腹が冷いやりとして蘇生るやうないゝ氣持だつた。

氷を飲んでから參詣をすまし、まだ眠つてゐる子供をお由は脊に負ふて、お鶴さんは紫の洋傘をさしかけて、皆んなの後から、そろ〳〵と矢張り話しながら歩いた。

歸つて來て見ると午後四時半となつてゐた。

若い實直らしい男の人が二階の私の居た部屋で着替をしてゐた。これが夏吉さんだといふ事はすぐ私に分つたので丁寧に挨拶をした。

『ようお出でになりました。どうぞ御ゆつくりなすつて下さい』と其の人は內輪らしく云つて下に降りていつた。

階子段の下で、上つて來ようとするお鶴さんと逢つたと見え

『舞子へ行きましたの。いつ見てもようおまつせ。今日は海は穩かで………』

とお鶴さんののどかな綺麗な聲がした。

其夜、叔父は碁を打ちにゆき、實と夏吉は揃つて町に出て了ひ、女達は、二階の露臺に圓く座つて涼みながら話をした。十二日程の月は諏訪山を黑く照らし、天の川が鮮かに流れて見えた。露臺の橫には白い倉が立つてゐる。お鶴さん達の死んだ母親——叔父は養子であつたのである——は家附の娘の我儘さで、叔父はそれを好まなかつたが、大の衣裳道樂な女であつたので、幾棹といふ簞笥がこの中に收はれてゐたといふ小母の話を私に思ひ出させた。そうした我儘は權高い母親の思の籠つた此の

衣裳倉の中はどんなになつてゐるだらうと思はせた。だがお鶴さんは衣裳道樂をしさうなんとは思はれない、話が段々恐しい事を喜ぶやうになり、女の子達はこわがりながらも化物の話をとねだり初めた。私は村の山入道の傳說を面白可笑しく話した。冬子はよく知つてゐるらしかつたが、娘らしい愧しみをして始めて聞くものゝやうに眼を輝かしてゐた。松の葉の間から二つの化物の眼がぎらりと現れたと云ふと、お鶴さんは、

『ほう、恐わや。それから……』

と猶膝をすゝめて美しいその白い顏を抑り上げて私をうながしたりした。それは十八の娘とは思はれぬあどけない表情であつた。

其の夜も白い手で蒲團を敷いて、

『ようお休み』

とにつこりして下りて行つた。

こんな事がもう七年の昔となつてゐる。其の翌年私は東京に出る事となり、翌々年弟の才輔が叔父の店に入つた。けれども才輔は商賣を好まぬ人間であつた。そして半年の間に脚氣となつて村に歸つて來た。翌年の春、私は祖母——其の前年に死んだ——の墓參に國へ歸る途中二度目に叔父の家に寄つて一泊して船に乘つた。乳母のお由もお鶴さんも三人の女の子も私を波止場まで送つて來てくれた其の時には須磨へ皆など行つた。

家に歸つてゐた弟は私達に、お鶴さんと夏吉とが思ひ思はれてゐるといふ事を噂した。そして叔父

は知らない顔をしてゐるが、どうか町の評判とならない中に婚禮させるやうにと心配さうに話した。其の翌年男の子の武雄が二三日の病氣でなくなり、後を追ひでもするやうにいつも青い顔をしてゐた乳母のお由も其の秋枕に就いて、翌年の春叔父の家で死んで了つた。次の年又私は國に歸り、上京の時に叔父の家をたづねた。叔火の家には私の弟の十二になる六藏が引取られて、女の子とともに學校に通つてゐた。お鶴さんを初めとして、皆なで神戸驛まで私を送つてくれた。

それから今日まで私は國に歸らないのである。考へて見ると彼の時の三人は――子供と負つてゐた乳母のお由と紫の洋傘をさしかけてゐた美しいお鶴と――この三人はもう此世にない。

五日程たつて私は冬子にあてて悔みの手紙を細々と書いた。それには舞子に行つた時の事を忘れられないと書かずには居られなかつた。(大正五年十月九日作)

太息

山田邦子

秋の田の穂田のたり穂の千百重波しかもなびくかゆえしらぬ間に

刈穂田のゆたになびかひ此年のみのるを見たる此夕べかも

秋の田はふさにみのりて黄金なすたり穂となりぬわが目の前に

早苗田のうすみどりなるさつきの日またかへらめや其すぎし日は

此年のみのりの前にわが涙流れんとして止めかねたり

○

苔むせる松に蝉鳴きうらさびし吾が悲しみを人知らめやも

たらちねの母が飼ふ蠶のにはやすみ身うごきもあへぬわが心かも

夕暮の池に浮べる水鳥の鴨の翼いろを吾が見つるかも

夕暮るゝ池のさびしさ鳴く鴨のこゑはきこえて暗き公園

立ち別れ幾日（いくひ）經ぬらむしましくも忘れぬ聲をきくよしもかも

○

十年ぶりたゞ一人なるわが從兄われを尋ねて來りけるかも　（天にも地にも一人なる從兄と十年ぶりに相見る）

血を分けしわれが心はたえられず從兄に逢ひて泣きにけるかも

言はんすべせんすべしらにわが涙たぎち流るゝ顔を見たれば

十年ぶりに顔は見にしかわくらはの吾等相寄り從兄妹なりけり

十年ぶり遠き國より上り來てたづねてくれぬ從兄にしあれば

○

はす花の聖きうてなにおはします佛等を見て羨みにけり（某寺におまんだらを見る）

なにしかも舌をばぬかれ手を切られ責めらるゝ身さはなりはてにけむ

ひよろひよろと三途の川を渡る姿あはれのはてと思はざらめや

いやはての八まん地獄に落ちながら鬼に追はれてなほも逃ぐるか

まさに見る地獄の繪圖のなかにして其み佛の顔あら尊や

いそのかみ乳母が敎へし極樂の水りんりんとひゞけるらむぞ

おさなくてたのみまつりしみ神にいまこそすがりたてまつるなり

木犀の花

杉浦翠子

朝の風しるきかをりに見出でける木犀の木の花はのかなり

我が思ふ君ははるけし木犀のかをりもいつか身に馴れにけり

木犀のたかきかをりに身はうつつほのぼのとして十日病みけり

しかすがに木犀の香に馴れ馴れて日も夕ぐれさなりにけるかな

眠り藥飲みてうつうついねんとす香にかをり來る木犀の花

木犀の香にかをるかな夢うつつ君を忍びの窓の起き伏し

雨降ればひそひそとして木犀のかをる小窓へ墨をすり居り

木犀のたかきかをりもいつしかと馴れ馴るるなり身のつれぐ＼に

つれぐ＼の日頃なりけり香にかをる木犀の花忘れかねつも

前號正誤「かなしきものは」や「かなしきものは「安からめ。」「とは安からん。とは」の誤

健康と美（續き）——ギルマン夫人——

岡田幸子譯

（下）

人間美に於て女が劣つてゐると云ふ、都合の好い證據はドクター・サーヂエントが一八九三年の萬國博覧會のために造つた合成的立像でわかる。アメリカ中の數千の若き男女の大學生を體操傳習所的測法によつて平均を計つてこしらへたのである。娘の立像は美しい顔をして手足は小さく劣弱ではあるが、美しい腕をしてゐる。然し足は太く短く胸や肩は貧弱で胴は全く哀れむべきものである。これに反して男の容姿は女よりも餘程釣合がとれて居る。

かくして人間美に男性淘汰が及ぼした影響は顯著である。男が勝手氣儘に選擇をした、結果女の上に及ぼした此の積極的害毒以上に女が選擇力を缺いでゐると云ふ消極的の影響が起つて來た。賣買略奪又は父から贈與される事によつて女は選擇權をうばはれてしまつた。「此の女は誰れが與へるのだ。」と丁度昔の結婚式に於る樣に今尚問ふと、一人の男が前に進み出て、他の男にその女を與へてしまふ。

自由に女性は勝利者を選んだ。そして敗北者は配偶者を得る事が出來なかつた。勿論子孫をつくる

事も出來ないのである。これに反して女は男に依據し、食を與へられ保護を受けると云ふ有樣になつたから勝利者は恐らく自分の最良のものを手に入れる。然るに敗北者は殘りのものを貰ふ。そして哀れむべき女は只「家庭のために結婚し」より好みをする事は出來ない。さう云ふ結果、劣等な男が、よりよき性質を與ふべき優秀者の樣に彼の劣等さを後に殘す事になる。近代に至つて女は他邦より或る國では自由である。此處近世のアメリカに於ては自由の自由中である。そしてその結果は健康と美の標準が改善されて行くのを見れば解るのである。

今尙男性の競爭の範圍が殘存して居るか。さうではなからうか。今尙男子は爭鬪してゐるであらうか。

昔の樣にその事は種族の利益の淵源だと云ふ事が出來るであらうか。

或る程度迄それはさうである。生活が單純で人の活動は主に爭鬪と勞苦だけだと思はれて居た時代には、他の者を征服する事の出來る男子は强大な人である。然しながら人間が社會の仕事を始めた時には男が相爭ふのは不利益な事になる。有機體を組織してゐる社會の必要條件は個人が分化し、各專門の才能を發脫させると云ふにある。此の事は個人の利益のみならず終局は社會全體の利益である。進步的で未來の必要を充す最も社會のためになる人はたとへ下等でもよく設立されてゐるタイプと並んだ時には常に不利益である。社會生活を營むのには、單純な男性の特質(慾望、爭鬪、自己發現)とは全く違つた性質が必要である。

所謂男ばかりの「外界」で働くのには人間本位である事を捨てゝ男性本位とならなければならない。今迄の歷史を通覽するのに戰爭はたやすく勢ひを逞しくするが、產業や科學の發達は遲々として困難

であると云ふ事實を見れば前の事は明白になる。

此の極端な男性の爭ひが健康と美とに及ぼした影響は論ずる迄もなく明瞭な事である。一般に男の考へで立派な姿だと云ふのは誇張し過ぎて、正當ではない、「勇士」に關係した事を讀むか挿繪畫家の描いたものを見よ。そして廣い肩巾荒くれた顏容、强くきちんと引締つた口に心をとめられよ。其の口は明らかに萬事やり損ふまいと云ふのである。

かゝる人物は斜視(やぶにらみ)で耳が開き、頸太(くびぶと)で顎足な事もあるが、然し少くも尖つた顎骨をしてゐなければならない。

然るに人類學者は、人間進步の經路はブルドックや鰐の樣な容貌でなく然しながらギリシャ式の整つた品位のある容貌へと進んで行くものだと敎へる。かう云ふ口の所有主は他の男性を征服する事は出來やうが、それ以上社會の役に立ち健康を進め美を高める事は出來ない。

尙進んで身體の皮相(うはべ)を裝飾すると云ふ事は此處に云ふ男性支配の如何なる影響であらうか。

私は前に人類の特異性即ち女と云ふ生き物で性的裝飾の重荷を負ふてゐる女性は外にないと云ふ事を申上げた。自然法則の此の驚くべき逆轉(リヴアサル)の結果はいくらおだやかに見ても愛と職務の自然なる女性本能を破碎して自己發揚と云ふ男性的本能の出現を見るに至つたのである。總ての生物の女性の中で人間の女ばかりが自分を飾りつくろひ男の愛を引くために借羽毛(文字通りに云つて。)を見せびらかす。經濟上獨立出來ず、一般に自救し得ないと云ふ女の境遇からして、已むなく此の屈辱を甘受してゐるのである。女は結婚した相手の男に依賴して總ての廣き生活を營む甚だしきに至つては、生活の必要上、結婚をする位であるから、從つて眞の女の面目にそむき、よぎなく競爭角逐しなければなら

ない樣になつたのである。

其の結果は天使を泣かせたり笑はせたりするのに充分である。美が進化發展する階段（ステツプ）の上から柔らかくて自由に出來る織物を後から後から、製織すると云ふ人力以上のものは恐らくあるまい。その織物はどんな色彩でも、地合でも御好み次第にこしらへる事が出來る。元來人體美は非常に優秀なものである。けれどもあまつさへ自由な手足に纏ふ柔く輕快な服裝が豐富な色彩に染められ、小波の樣に優雅にそよぐのを見ると今迄にない優美と悅樂の新方面が開けて來る。自然の勢ひとして、津々浦々迄も今迄になかつた悅樂で溢滿すべき筈である。衣服（ガーメント）は第一に正當な自然淘汰上使用法が發達し、正當なる性的淘汰上美しさが增し、尙進んで人間の美意識が發脫するに從ひ一種の高尙なる象徵となつたが、今や加ふるに力と光輝、換言すれば永遠の歡喜をもつてすべき筈であつた。

しからば事實の眞相はどうであらうか。

周圍が極端に男ばかりであると云ふ事情にもとづき、現在の男の服裝は實用が主となつて、美しさと云ふものがない。しからば女の服裝はどうであらうか。

たま〳〵流行だと云へば女は美しい衣裳でも、醜惡な服裝でもかまはずに着て美醜を辨別する事を知らない。美しいからとて誇るのでもなく、醜惡だからと云つてはづかしがるのでもない。また批評には馬耳東風でいかなる勸告論議に對しても耳を貸さうともしない。何故女はこうなのであらうか。

女は心身ともに非常な病的狀態におちいつて居る。衣裳や裝飾の事で全然有頂天になるのは正しい事ではない。今日に至る迄女は人間としての立場から公平に自分達の位置や特異性を考慮した事は未だかつてなかつた。

公共衞生に對する間違つた關係の結果を考へて見るのに、私は女が家にばかりくゝりつけられてゐて、しかも煩累に堪へない著物を著てゐるのは活力を消耗してしまつて發達を防害するものであると云ふ事を前に述べた。原因は同一であるが、結果から見て尙一層有害である影響がこれに續いておこつて來るのである。簡單にあらましを分類して見ると下の三つである。(一)惡い空氣の爲におこる疾病。(二)惡い食物から生ずる疾病。(三)今初めて論じやうとする慘虐なる疾病即ち此の疾病は男女の間違つた關係に直接その責を歸すべきものである。

總ての生物の生活上女が男に依賴してゐるのは、人類だけである。淫をひさぐのも人類だけである。始めは此の一般關係を無害だと思つて居たが、次にはその害毒をよく意識する樣になつた。長い間それを「社會的必要」と云つてゐた。そして「罪の報」と云ふ至命的の結果が續いて來る。死神は罪を犯せるものゝみならず無辜のもの迄も奪ひ去つて行く。

男性の意慾を基礎として立つてゐる社會は唯々諾々として多くの女子を犧牲に供し、しかもその犧牲者に重刑を科すると云ふ事は男性中心文化を批評する上に於て重大である。

不幸な女が疾病にかゝつて死んで行くのは正當な責罰だと考へられてゐた。多くの法律が制定され醫術藥餌の力を借りて男を庇護したにもかゝはらず、男も亦一部の責を負はねばならないと云ふ事はさく可からざる事であつた。然し今や社會はそれ以上の結果に氣がついて來た。

今の文明は男性が建設擁護してゐるものであるから、男はその文明が生んだ慣習と公許を楯にして外で犯した「罪の報」を身につけて、自救の力なき無辜の家庭へともどつて來る。そして罪の報を非常に過重して家族の者に感染させる。盲目、癩病多くの恐るべき種類の疾病、白痴、癈疾、不姙症、死

生兒、早逝兒及び妻が不健康におちいり、外科手術を受け、慘澹たる生涯を送るに至るその割合は此の恐るべき男の屢々犯す罪惡に歸すべきものであると云ふ事を氣がつき始めた。生活がもつと人間本位になつて、男性の分子が減滅される時になつたなら私達は此の事を眞の光に照らして見る事が出來るであらう。現在私が論じやうとする主題は恐るべき事を並べたて專門的の徽細な點を說明しやうと云ふのではない。只此の疾病癈退の原因を探究して行くと結局男性中心文化に到達すると云ふ事を指示しやうと思ふのである。

文明は半分でも女が代表してゐるものであるのに、その文明が母子に對して罪を犯し、生命の流が湧き出づる時すでにこれを毒してゐると云ふ事は想像も出來ない事である。

女が男に依據してゐる此の文明に對し、これ以上俊烈で首尾一貫せる攻擊はない。「先天的の保護者」であると誇稱してゐる男が非保護者の大多數を悲運零落の淵におとしいれ、それのみならず自分がすれば非難責罰もしない事を女がすれば辯難嚴罰する。そして此の慘虐な判斷に照らしてみて幸福なる女を非難する。とりわけ無辜で信賴してゐる妻と自救の力無き小兒に自分の非行の結果を齎らせる。

此の男性的分子が勝ち過ぎた社會組織が私達の健康に及ぼす害毒の他の二方面は餘り人の注意を引かないが、然し其の影響する範圍は一層廣汎である。近代的治療術では多くの呼吸機病を一般に「家內病」と云つて分類して居る。或る種の黴菌は家內の汚れて溫い空氣中に無限に繁殖する。人は汚れた空氣の中に閉ぢ籠つて常にこれを呼吸して居れば居る程自然の大氣に合ふ機會は少くなる。宛然私共は惡い空氣に慣れて來て、寺院、乘物、芝居及び人の群衆する店でも、自分の家で慣れてゐるから、同樣な惡い空氣を厭はない。新知識を持つてゐる衞生學者や、醫者は家內の習慣に極力反對する。然し

習慣は知識より古く、しかも廣く行き渡つて居る。そして私達は一國民として或程度迄馬鹿になつて自分の肺が毀損されるのに甘じてゐなければならない。もし此の事が食物上の事であつたらそれこそ恐れてしりぞけるであらう。

さて女は男と等しく先天的には洞穴にばかり住んでゐるものではない。彼等は母たるの務め以外の理由で屋内に閉ぢ込められてゐるのである。自由な外氣の中で生活する事は男子にとつてよい事であると共に女兒にとつても効能があると云ふ事を今日に至つて漸く再び氣がついて來たのである。此の敎へはスパルタの沒落以來稱導されなかつたのである。雄獅子と雌獅子と比較する樣に男は大さと力の點で女に比較しなければならない。方々移住する鶴も雌雄共に移住するのであつて、特別に雄ばかり移住するわけではない。屋内に生活するのは男にも、女小兒にもよくない。强制的に女を制限した結果は再轉して男とその小兒の上に現れて來る。

醫者に知られてゐる各種の病氣の中で「胃腸病」と呼ばれてゐる疾病を防ぐには、いさゝかも進步の跡が見えない。人間は種々の病氣に苦しめられて居るが、「消化機」の故障は一番普通でしかも治療難の甚しいものである。一體、私達は富んで力があり、敎育があつて怜悧で强く大に進化してゐるものであるが、食物がそろ〳〵と齒を離れて急速に働いてゐる消化機に行つて仕舞ふと、人間は病氣に引かゝつても最早自救の道を講ずる事は出來ない。人間の長き進化の道程に於て私達はあらゆる事を研究した。然し何を、何時、どう云ふ風にして喰べるかと云ふ事を未だ嘗て學習した事がない。

それは非常におかしい事である。

かゝる困難は他の動物（或程度迄人が馴養した動物は例外として。）にはない事である。今日此の問

題を解決する爲に多くの知識が提供され、改良した食物をとると云ふ習慣を敎示しやうとしてゐる。然し私達は永續的な世界的な災害の原因を知らずに居る。それは簡單な事である。男は各々自分のために一人の女全體を領有して厨房の事を司らせると云ふのが其の原因である。そしてもしも男はさう云ふ事が出來るならば一人よりもより多くの女を領有する。「男の心に取り入る唯一の道は胃の腑を滿足さしてやる事である。」と云はれてゐる。「妻」と「料理」と云ふ二つの事は長い間離す事の出來ない事になつて居て、今では此の二つの言葉は男にとつては同意味の言葉になつてゐる程である。

獨立獨步出來ない女は厨事を以つて重要な仕事として居る。これによつて愛を表現し務をはたす。そして女は自分の要求する種々の條件をたしかめるのである。「結婚してから幸福になる秘訣を敎へて下さいませんか。」と既に嫁入らうとしてゐる花の樣な娘が優しい顏をしてゐる祖母に質問した。さうすると平靜な刀自は「獸的な奴に物を喰べさせてやる事だよ。」と答へた。それが結婚に對しての幸福の秘訣なのである。

此處に提示しやうと云ふ要點は此の食養法が人にとつて好くないと云ふ事である。親切な下婢即ち妻を始終自分の思ふまゝに使ひ廻して居ると云ふ事は、健康をもたらす道ぢやない。愛が勝つと知識の眼が曇り、愛情に富むと物をするのが鈍くなると云ふ事は、世界を食養する此の大役からすると、注意を要する事である。女は始終男の食慾を滿すために調理してゐる。女はヂョーン(男)の嗜好に適するものはよく知つて居るけれども、その食物が每日起す各種の科學作用が男の內臟に不幸をもたらすと云ふ事はいさゝかも知解しない。私共が家庭で男の慾望を絕えずかなへて物を喰べさせると云ふ恐ろしい點が、夫が外に出て勝手な眞似をする原因になつてゐる事實に氣がつかないで居る。「母たる

ものが厨事を司る。」と云ふ事の心的影響は未だ人が考察しなかつた事である。藝術、科學、職業は家内の天地に限り、勞働の生產は只一個人の爲に營まれ知識に依らないで慾求の向ふがまゝに放任する時代に於て藝術、科學、職業の三者は到底遼遠なる發達をとぐる事が出來ない。主君の命これ從ふと云ふ風な下婢的妻は最善の利益をもたらすものぢやない。根本に於て誤られたる關係は如何なる方面に向つても正道に復する事は出來ない。

女を男の婢僕たらしめる事は世界の健康上安全確實と云ふ事は出來ないのである。

今日人間の男女は等しく自分の愛兒に不具疾病を遺傳するものであると論ぜられて居る。此處に於て新らしい道德は招致せられ、その進みは遲々として居るとは云へ社會に姿を現して來た。そも〱その道德觀と云ふのは幼兒の父親が選擇上太古の人類が取つて來た、臭い物には蓋をしろ主義を捨てゝ肉體上純潔なる遺傳を保證すると云ふ義務を母親に問ふのにある。

進んで私達は此の場合に於て罪人の上に新らしい判決が必要である以上に現在の道德法を破碎するのみならず又、社會率に反對せる罪人としてのみならず――その罪は非常に輕く度々小言を云ふ位ですまされてゐるが、それはたしかに普通の犯罪で毒殺、虐殺人と同じ罰を與へべきものである。

もしも人が自分の妻を毒殺したら、彼は刑事上の罪人であるし子供を射殺したり、子供の手足を斧で切つたりすれば、やはりこれも罪人である。然るに知つてゐながら自分を信じる妻に病氣を感染させた結果、その子供を盲目にしたり、白痴にする。又然らずんば妻を不姙症にさせたり早逝させる。これらは前述と同じ罪科ではないと云へやうか。恐らく同じ事ではあるまいか。(完)

期待

首藤郁子

『期待』これ程緊張した意味をもつた言葉は無い。人生のすべては期待によつて引締められて行く。期待は希望を生み、希望はその結果を期待に置く。期待する事があればこそ、我々は我々の生活に意義を見出し、怠慢を排して行き得るものである。

『天國は燈を執りて新郎を迎へに出づる十人の童女に比ぶべし。その中の五人は智こく、五人は愚なり。愚なる者は其燈をとるに油を携へざりしが、智き者は其燈と偕に油を器に携へたり。新郎おそかりければ皆假寐して眠れり。夜中に叫びて新郎來りぬ出でゝ迎へよと聲ありければ、童女等皆起きて其燈を整へたるに、愚なる者智き者に云ひけるは、我等の燈火消えんとす、願はくば汝等の油を我等に分け予へよ。智き者答へて云ひけるは、我等と汝等とには恐く足るまじ。汝等賣る者に往きて己が爲に買へ。彼等買はんとて往きしとき新郎來りければ既に備へありし者は之と偕に婚筵に入りしかば門は閉ぢられたり。』と、キリストは人々に取りてこの譬を談つてから、『然らば怠らずして守れ』と云はれてゐる。怠らずして守るに期待無くてどう爲よう。期待ある者は用意に怠り無い者である。常に緊張した心をもつて緊張したライフを送る者である。希望で無い、目的で無い、理想で無い。希望の期待、目的の期待、理想の期待なのである。いくら大きな目的と希望と理想とを持つてゐても、もしそれに期待が伴はなかつたなら、それ等は皆妄想である、夢惱である。そしてそれには緊張が無い。用意が無い。はじめは

同じに新郎を待つてゐると見えた十人の娘のうちの五人は、いざといふ場合になつてその不用意を暴露した。他の五人と同じく待つてゐたのでは無いか。然るに、何故この場合になつて恥なければならなかつたのか。それは待つてゐる形は持つてゐても待つてゐる心を持たなかつたからに他ならない。待つ心は其の結果を思ふのとは違ふ。結果の何處は問題以外である、結果はまたそれ以上の期待を齎す筈であるから。結果を慮る心は疑を伴ふ。『信じて之を求むべし。疑ふ者は風に動かされて飜る海の浪の如し。』と我等は當然有り得るものを當然來るべきものとして、疑はずして待つ處に生活の意義を見出さねばならないのである。結果を待つのでは無い、來るべきものを待つのである。そしてそれは我等が待つのでは無い『我』が待つので無ければならない。我が切拓いた境地によつて我が立脚し我が確信し我が待つのである。用意の油は他人から借りる事は出來ない。己の油は己の爲に己が買はなければならない。團體的でも無い、國家的でもない、社會的でも無い、たゞこれは自分一箇の問題なのである。もし團體關係をもつて間に合せられるものならば借りる事も出來ようけれども、婚筵に入り得た者は各々怠り無かつた五人の各々であり、門を閉ぢられた者は來るべき者を待たずにその結果を待つてゐた不信の五人の各々であつたでは無いか。我は個人である。國家的我だの社會的我だのといふけれども、それは個人の集合して存在する團體に對する個人の感情から起る我の分子であつて全我ではない。我といふ者は遂にたゞ一個の我であらねばならないのである。故に、待つものは自分の待つものであつて、他人のものを待つのでは無い。各々が待つのであるから各々が用意しなければならないのは當然である。用意――その用意は裏切られぬ用意である。門を閉ぢられた者等はその期待を裏切られた事をいかに悲しんだであらう。いかに失望したであらう。彼女等の期待を裏切つたものは彼女等自身の不信であつた。それと反對に、緊張したライフにあつたものは理想の門に入り得た。思へ、この五人の娘の快心の笑を。それは恰度黎明の空氣の冷た

い中に、ほのぼのと光増す曙の色に向つて一縷に望み待つてゐた心がやがて現はれた日輪の輝に接した時の充實した喜びの笑と同じであつたらう。揚々として昇る日輪の雄大の前にあつて見れば、一抹の飛雲にも何等かの意味を感じさせられるではないか。思へ、この五人の娘の快心の笑を。彼女等は期待するものに逢着し得た喜びの外に、いかにその充實さに加へて一層新なる希望を持つたのであらう。いかに大きな期待を新郎の顏を見た事によつてまた新に持つたであらう。彼女等は此處に、期待の結果からもう一歩進んだ期待を得たのである。久しく戀ひ慕ひ乍ら逢へなかつた戀人を、必ず逢へるといふ緊張した信念を持つてゐて遂に逢ひ得るの機會に接した時には、其處に新な光を見出して、運命が開けて進むのを覺える。逢得た結果を喜ぶのは、それまでの自分の努力に應報(むくひ)られた滿足の歡喜であつて、其處に自分の一進境と運命の曙光を認めて新な期待に生るのは靈の成長なのである。健かな精神と寛大な愛は此處に胚胎する。

小事は大事の基礎とか云ふ。この期待の心は、たゞに心靈上また生活上の大きな問題としてのみ論ずる事では無い。些々たる日常生活上の茶飯事にも、此心は實行されて行くべきである。人生の道を忠實に歩む者は、日常の出來事の一つ一つに對して忠實な批判を正しい期待を持つ人である。裏切られる事の無い期待は、やがて我等がパラダイスに達すべき階段なのである。

某夫人に與ふる書

泉ゆり子

小夜子樣――

お初に御意を得ます、私は櫻井花子で御座います、奥樣!!! 貴女はこう申したばかりで、もうお胸がお騒ぎになりませう!!! 御尤な事で御座います

何にも御存じないお孃樣が其清い若々しいお胸の中に初めて未來の背の君として示された精樣は世にも頼もしいお方でした、學識に才能に品格に何に彼に申分ない美しい青年紳士を、殊に幼な馴染のなつかしみ深い貴女は嘸戀しく慕はしく思召ましてせう、月に日に近づき來る御結婚の日を思つては人知れぬ微笑みの秘めかぬるお樂しみに高鳴る胸を長いお袂にお押へになつた事でせう……

精樣から「小夜子は僕の外に男は無いやうに思つて居るらしいのです」と伺つた時、私は今此世で一番幸福なのは貴女と思ひました。

輝かしい其日は遂に貴女のお手に來てお目出度御婚禮を遊ばした時、貴女は幸福の絶頂でいらつしやいました、靜浦や三保の松原清見寺密月のお旅の思出まあどんなにお嬉しかつたで御座いませう

所が二ケ月あまり過ぎた或日、不圖思もかけない出來事が起りました、それは私から精樣に送つた手紙を貴女が御らん遊ばしたのです、春の海のやうにおだやかに暖かい夢を見て入らつしやる貴女がたの御家庭に小石を投げた程のさゝなみも立てるのはお可哀相だ、と深く決心して殆ど死だ氣になつて默つて靜まり返つて居た私を、いゝ幸としてうつちやつてお置き遊ばす

精様に愚痴を云つて上げたあの手紙は第三者の目から幾分不可解の書き方をして置いた場所もありましたけれど、それでも大方の御推察は付いたと見えて、貴女は大變お嘆きになつたさうで私は精様から「もう手紙を決して寄越すな」と仰有られてしまいました。

新婚の甘いお夢のさめない内に、其頼もしい戀しい背の君に女が有つた!!!とお知りになつた刹那の駭き! そりやもう重々お察し申上ます。奥様貴女のお心中を思ふと本當にすまないと思ひます。私は罪の深い女で御座いますけれども其貴女のお苦しみは當の御本人の精様がよく御分りになつて入らしつて、實に可哀相だ、といとしがつて入らつしやいました而して戀人を奪はれた私の苦しみは誰も察してくれるものも有りません、生活の邪魔をしてはいけない、とばかり私に出來ない辛抱をたゞお强ひになるのです

奥様! 小夜子様、貴女は酒屋の淨瑠璃をお聽きになつた事がおあり遊ばすでせう? あのお園は何と云つて居ります?

そりや私は罪の深い事を致しました、身分の低い女優風情で貴女の大事な精様を戀人にしました、しかも私は今精様の子供を生みました。ま、こう申すと猶更びつくり遊ばすでせう、嘸憎い〳〵とお腹が立ちもするし、又それ程で有つたと流石にお心細くも思召すでせうが、私はもう貴女に見代へられた女で御座います競爭に御勝ちなさつたからこそ貴女は精様と結婚なさつたので御座います、もう貴女は推しも推されもせぬ立派な奥様になつておしまひ遊ばしたぢや御座いませんか

お目出度う御座います、およろこび申上ますそれに引代へ私の今日此頃の苦しみはまあどれ程で御座いませう、そりあ原より私は精様の令夫人として一生連れ添ふ果報は得られない身の上とは承知の上でございました

それだからこそ最初にエピソートの戀はしない私はそれ程にすぐれた女ではないからと精様にお斷りして此切ない初戀を思ひあきらめ片戀の涙を其儘に我胸一つに秘め終ろうと思つて居ました。

それも此世の制裁はどうあらうとも我々二人は人間の手の屆かぬ世界を作つて見せよう、夢の世に生き夢を見て戀をして行かうとさう〱私の身も魂も御自分のものにしておしまひ遊ばしたものです。それで其身も魂も捧げ盡した女を省みもせず今は平氣で貴女と一所におなりなすつたので御座います、而して捨てられた私は何にも云はず自分の腕一つで子供を育てゝ居ります。何事も我意志の弱かつた爲めだ、人は責めまい!!! たゞひたすらに覺悟して死んだやうな氣になつて暮しては居りますけれど、何にも知らない神樣のやうな子供の顏を見ると…… 嗚呼私は、私は本當に死ぬにも死なれない苦しみに泣かされます、恨めしい、恨めしい、と思ひながら矢張り私は精樣が戀しう御座います何物にも代へがたくなつかしう御座います。

其戀しい人、此世にたつた一人の其人は貴女に取上げられたので御座います、貴女は精樣の奥樣になつて其人に仕へ其人に養はれ其人に愛されて毎日〱同じ家に樂しいうれしい月日を送つてお出になるので御座います。

あゝ小夜子樣、私はたゞ貴女が羨ましう御座います。貴女が私をねたましいと思召したやうに私も貴女がねたましいとも思ひます、恨めしいとも思ひます、けれども私は其戀しい人のため其人の出世のために生活の邪魔をしないでぢつと暗い涙の中に浸つて辛抱して居ります、御出世前の大事なお體を女優なんかに關係しては、と呉れ〱御遠慮したものをかまはない……何も彼も前世の約束とばかり仰有つて頂いた昔は忘れ果てたやうにあきらめ盡したゞ身一つにおさめて居るので御座います

そんな女が有つたのなら今に私も捨てられる……と貴女は精樣は仰有つて御心配なさつたさうで御座いますが、何の〱怜悧な精樣の妻とした女を捨てゝ紳士の對面を汚すやうな愚かな眞似も遊ばしますものですか、御自分の——半身として貴女を敎育し貴女を磨いて行く〱は共に御出世なさらうと樂しみにしてお出になります、現に一寸でも貴女の心を痛めてはいけない、と私に迄お命じになる程ぢや御座いません

か、其爲めに何者にも勝る苦しみに落ちる親子の出來るのは犧牲にしてもたゞ御自分達さへよければそれでいゝと思召す位、それ程貴女を御自分の片割れに大初にしてお出になつて居ますものを……。其人に訴へ其人に縋つて泣く涙もまあ私から申せばお羨ましい一つで御座います。

　幼い時から、美と賢と富とに付いて自信を持つて今迄誰にも退けを取らなかつた私が、たとへ百萬長者のお孃樣とは申せ、何一つ私に優れた技量も持つて入らつしやらない貴女に、やすやすと戀人を奪はれた馬鹿々々しさに或時は、必らず勝つて見せる！と力強く覺悟した事も御座いました、又或時は此世の望みも樂しみも失ひ果てた淋しさはかなさに、尼にでもなつて山奥に世捨てた生涯を送ろうかと、悲んだ事もございました

　櫻井花子とも云はれるものが、今の身のみぢめさ!! と省みる耻かしさに何故一生に一度の戀でも思ひ切つてもしまはないで人に許したかと後悔した事もありました。

　けれども今は何も彼もあきらめました、一時はこれのみと迄望んだ、死と云ふ事も我子のためにひかされて成し遂げ得ずに、相變らず舞臺に立つて何にも知らない世間の人に見物されて居ります。

　意地にも立派に勤めなければならない、意地にも自分を磨かなければならない、と云ふ氣の張りに一日を暮して、さてさて我子の枕邊にホッと休息の膝をくづす時……罪のないみどり兒は……戀しい人のひな形のやうによく似た顏をして美しく眠つて居ます、あゝ其時、私は命も絶よとばかり泣くので御座います

　我儘勝氣な私でも今迄隨分人情と云ふ點に於ては人を痛はつてやりました、思ひやりと云ふ事を承知して自分を抑へても人をかばつてやりました、おとなしいお姫樣と云はれてお育ちになつた貴女には却て此點で思ひやりがお有りにならないと思ひました、否人をかばふ程の力が未だ養はれて入らつしやらないから、たゞ御自分の夫の愛を専有するのにばかり一生懸命で、女同志の義理情けも云つて居る暇がおありなさ

らないのかも知れません。
けれども私は今何も彼もあきらめて、自から落ちた暗黒の世界からでも、矢張り貴女を憎みはしません、戀しい人の奥樣で有る貴女は矢張り立派で有つて欲しいと願つて居ます、ですから小夜子樣、あなたも無駄な苦勞は止めにして精樣につまらない愚痴や涙を見せず男が面白く自分の事業につとめられるやうに骨折つて上げて下さいまし
櫻井花子は、子供を引取つて呉れとも云ふ氣づかひなく、自分がお宅へ頼つて行く程にもなりは致しません、まして貴女を捨てさせて今の私と同じ憂き身とするやうな、物の分らない人間ぢや御座いませんから、もう少し落付いて下さいまし而して大きな人間……におなり遊ばして精樣を滿足させるやうにおつとめ下さいまし小夜が心配するから、僕の生活の邪魔になるから便りをするなと命ぜられた私は、これだけ貴女に申上て、また無言の孤獨を續けて參ります失禮致しました、御機嫌よろしう

十月十九日認む

花子

小夜子樣

兒犬の死

岡本かの子

我が生みしもののごと君のめでませしいとし兒犬は死にけるかな

夕されば君待つ門に我よりも先に停む汝なりしかな

或時は二人がなかにいさかひをいぶかしげにも見てありし汝

君待つと寄りし樹かげに捨られてありしのみさへいとしきを汝

そも何の兆候ぞ戀のただなかにふとあらはれてふと亡せし汝

やりもせぬ乳なりしを汝がふところに居ねば乳もさへ腫るかとかなし

昨日まで我が小庭邊のだありあの葉かげに汝の戯れてしものを

あまりにも可愛ゆきままに汝を籠めて外にやらざりし我なうらみそ

死にて行くものと知りせば野に山に放ちて戯るる汝を見にけんを

次の世は人身と生れてわが乳をも吸へかしわれにものも言へかし

いかならん宿世ぞ人身の世に汝は母のなげきをのこして亡せぬ

嚴に迫る死のまへいかでかは人身と汝とことなるべしや

しろがねの鎖一すじ初秋の軒端に殘し兒犬果てけり

ただひとつ汝が背にありし黒き斑もやがて死ぬべき兆候なりしか

戶閉づればひたすら泣きて細き尾に閨の戶打ちし汝なりしかな

早さめて外の面に汝が待つけはひ覺えいそいそ起きてしものを

戶をくれば庭の樹かげのゆまりのごとまるび一つ我に馴寄りしものを

覺束なく我が造りたる犬小屋に寢ほけし汝(なれ)もいとしと見し朝

敷やりしふとんに散れる眞白なる汝(な)が落し毛も惜しとひろひし

叱られて君がかたへに泣ける夜も我がかたはらに汝(なれ)は居寄りし

かへすべき言葉も知らで君がまへ汝(な)を抱きしめてひた泣きしかな

淋しさに汝(なれ)を抱けば眞白なる毛並にわれの涙まろびし

汝(な)が行くは瞑府(よみ)のいづこぞ人の兒はさいのかはらに石積むてふを

今ぞ汝(なれ)がふところに安らかに死ぬかや生みの母も求めで

まぼろし

秀　輌　音

さびしらの河原に立ちて舞妓らのまぼろし追ふやかのたはれをは

又しても京をしたふてこがれゆく君にしあるが身のやりどなき

やめる日も倘化粧しておはしける君にしあるがいとしいぢらし

うつとりと病みつかれたるめをあげて絶えすもおふか君のまばろし

きまぐれの君のすさひに一しほのおもむきそへしお六ぐしかな

たはむれに姉とよばれて姉らしき便りをかけば淋しさのわく

我が心さだめかねつるたまゆらを君はかたへに苛ちおはす

小指はもからめ合ひつゝ誓ひける嬉しき日にも桐の花さく

金のしぐれ

櫻井八重子

天地の水色に透く朝にして息すれば身の魚とおもへし

赤きいろ新にふさはずとく散りて白ばかりさけつまぐれの花

ほそ〴〵とコスモスの軸くれなゐに少しいろづき秋に入りけり

あしもとの土もくもくともりあがり土鼠が秋をのぞきに出でぬ

幾日も梳らぬ髪をすきかへし新になりしとかこひけるかな

夕映の空たちまちにしぐれきて降るよ銀色雨金色のあめ

金の雨花ゑんどうをほろとうちほろと散らしてまろびけるかな

美しき雛妓(おしやく)一人がひそやかに子役の部屋をかいまみてけり

秋を知る

秋野多香子

しぬびつゝいまだもゆかぬ草の實のいぢけて散ろふ野邊をしぞ思ふ

秋ふかし此日もすがら聞えくるのみのひゞきを吾がきけるかも

たゞ一つのみ音こそ聞えくれ秋深かければ靜かなるかも

往還に秋の陽あたりなつかしく家を出でたる眼(まなこ)は痛し

さなかなる秋の野路ゆく淋しらに大豆の葉をならして見たり

大豆の葉をうちならし心ふと故郷の野にかへりけるかも

ゆきずりにすごき取りたる稻の實の一粒をこそかみにけるかも

喰(た)べすてし夏のかたみよ石あひに瓜の若芽の青芽のびたり

車忘れそ又も來(き)ねさていとほしき一ぱいに燕をおくる

朝露の野菜畑のなかにして身も青みてぞ茄子切りにけり

みじろげはしるしも動くものゝ氣のすみかへりてぞ秋ふかむらめ

ほゝすきと故郷

世良田優子

秋の空冷たく澄みて山茶花の咲きたる家をわれ忘れめや

今は早や遠くわすれし彼の人ぞ山茶花の花咲き初めぬらん

洗がみ小窓に干してはる〲と物思ひたる家をし思ふ

打なびきほすゝきゆれし故郷の山にも秋はたけにけらずや

ほすゝきのなびくを別けて率りたる故郷山とかの日の人よ

山々の木の葉も紅くなりつらん故郷山に遠く別れて

いく年を都にうつり住みしより故郷人も變りつるらん

科來なばかの山栗は熟れ落ちん寺に嫁きける友をし思ふ

御佛につかふる人に聞きしかど秋は悲しく嘆きおはさん

けいとうは眼さむる計り紅くして秋の雨ふる窓越しに見ゆ

やみ深くいつ晴るゝとも秋雨の空には秋の更けにけるらし

雜沓都の町の夕空に澄み登りたる今宵の月は

窓打ちてふく雨風の淋しさにこもりて暗く戸を閉ちにけり

しみ〳〵と秋はわびしも一人われ夕ぐりやに炊ぎし居れば

雨晴れて秋の朝露置き渡し木にも草にも渡る秋風

無果花は熟れにけるかな秋更けて梢を高くあきつとぶ見ゆ

明星は窓にかゞやき朝床に何を祈りて起き出んわれは

黒かみをけづると朝の窓近く馳れたる桐も今朝は落ちける

起き出てゝ朝の廊下を歩まんと素足冷たく秋はわびしも

いねんとて暗き階子を登り來れば靜かなるかな更けし秋の夜

時知らず咲くらんものか山吹の秋の日長くさけば淋しも

春の丘（續）

川路歌子

3

半年ほど後のことであつた。

少年の寄宿してゐる家は、少年の叔母の嫁した先きで、主人は阿美佐の父親と同じ官省に勤めてゐるのと家が近いのとで一共に寄席へ行くくらひの親しさを持つてゐるので、少年も自然遊びにくるやうになつたのだけど、その家の主人が急に大阪へ轉任して行つたので、少年も神田の近くへ下宿したとか、そしてゐる内に、阿美佐の家にその名も出ぬ樣になつた。その間よくあの丘の上で阿美佐は少年と出合ふ事はあつたけど、笑顔で話すことをしなかつた。少年が丘を上つてくるとき知らずに丘を下りかけてばつたり出くわすときなどは默つて只、頭だけは下げるけど、すれ違つて終ふと阿美佐は飛ぶやうに駈け出して終ふのが常だつた。そんなときは家へ歸つても外の事は靴のぼたんをはづし乍ら大きな聲で母親にしかられ乍ら喋るのだけど、その事だけは決して話さなかつた。

晴れた日曜の午後であつた。梨の花が白く碧空に輝いて、濃綠の葉ざくらが、眞木の生垣を越えてあたりいつぱいにおひひろがつてゐる。敷石の上へハラハラと、白く梨の花が落ちてゐる外はすべて

長閑に靜けさが保たれてゐた。さうしてその梨の花の散ることが、この靜けさの息のやうであつた。

阿美佐はいく枚かのカードと更へられた奇麗な、聖畫のあるばむをくりひろげ乍ら敎會から歸つてきた。その赤い草履から白く輕るやかに砂が舞つた。

ちんまりとよく形作られた庭にそむいて、緣側で日向ぼつこをし乍ら何やら解きものをしてゐる年老いた婆やの脊から、薄い白毛の型ばかりの丸髷へかけて、やんわりと日の光りが流れてゐる。婆やはゆつくりと體をねじて阿美佐の足音の方をまぶしそうに首をさしのべて阿美佐を迎へた。

阿美佐はいつもの樣に牛乳と菓子が置かれた小卓が前へ持ち出されてもその畫面に見いつてゐた。

毎日曜日ごとに敎會からもらつてくる。一寸に一寸七分位の厚い紙片に、美しく彩られた、いろいろの花と、聖書の文句をぬき書きにしたカードが、救世主エス樣の御年になぞらへて、三十二枚たまるとそれが大きな聖書とかへられ、その聖畫がいく枚かして大型の厚い紙に、たとへやうもない程美しいと阿美佐に思へる、デリケートな彩色のアルバムと更へられるのである。

群青の空が遠く澄み渡つて、起伏するたくさんの綠色に塗られた山の頂や、窪に建られた美しい杜のたち並んだ家など背景にして、キリストが澤山の善き人々に、愛の敎へを説いている繪、後光の輝く冠した優しい聖母マリヤが、白い百合を持つた美しい天使に取り卷かれてゐる、細かな彩色がいつ迄も、阿美佐の不思議な憧憬をそれからそれへと呼び起させた。

笑ましげな淸らかな聖母の膝に抱れて、杖として十字架を持つた、毛物の皮を腰に纏つた、子供のヨハネにあやされてゐる幼いキリストのその繪の上には、白い鳩がむれ飛んでゐる。美しく立ちこめた家並の傍の小山の上に、罵り騷ぐ群集に圍れた、罪を犯した貧しき女のキリストの前に引きすえ

られて、キリストは只うつむいて黑き土の上に文字をかいてゐる。この中に記された話しの內で阿美佐の知つてゐるのも知らぬのもあつたけどいくどもいくどもあかずくり返しくり返し見てゐた。デリケートな色ずりの畫の中には又、黑い背景の前に、聖徒のゐまた、圓光を頭に頂いて、緩く步むのもあつた。

薄みどりの若草色の丘に續いた、細い葉の茂つた森の中に、荊の冠が柔い額にくひ込んで、生々しい血がにじんでゐるキリストの十字架に釘けられた繪は、阿美佐には怖しいので、早く繰つて終つたこの畫帳はこの繪で了りになつてゐた。

畫帳の中にちようどあの丘のやうなところがいくらもあつたので、よく似てゐると思ふと、今迄忘れられてゐた少年の事、そしてあの夜にいつての森の事など浮んできて思わず繪を伏せてあたりを見まわした。

「孃ちやん乳がさめて終いますよ」婆やに云はれて、始めて乳のコップに手をかけた。かるいつかれが阿美佐の體をとりかこんだ。

「孃ちやんはもう榮次さんにはあれからお會ひになりませんか」

阿美佐は不意に內諸に秘めてゐた事を見つけ出されたやうにはつと思つたけど、何げなく

「妾もう會つた事なくつてよ」

婆やは紙包みのお菓子をむいて阿美佐の前へ差し出して、柔和な聲で話し出した。

「ではやつぱりあれは眞事なんですね。」

婆やはよくそろつてゐる襟もとを一寸ついて、解きかけた着物を引きよせちよきちよきとはさみを

日の光りに輝して解き續けた。

「あの榮次さんは先月かお國元を勘當されて、横濱とかで土方になつていますと」

何故か阿美佐は冷つとした。そして生溫い乳を含み下して、繪の方を見やり乍ら耳をかたむけた。

「何して？」

「あんな溫和そうな方がね。あの方は何でも不良少年とやらの仲間で、學校の方は退學をされるし警察からはやかましく國元へ言つてくるので始めて皆さんが知つて、仕方がないので、大阪へいらつした榮次さんの叔母さんも歸つていらつして、方々の借金をしまつなすつたり何かなすつたのですとまあ見かけによりませんわねえ。」

阿美佐は譯もなく悲しくなつてきた。そして流行ずくめの姿ときたない土方姿とを少年の賢こそうな顏立ちにそへて見た。

「大阪の叔母さんは泣いていらつしやいましたよ。實家が何しろあんまりお金持だつたから惡かつたのかもしれませんよ。何でも妾の子だとか、横濱へいらつしやるとき孃ちやんの事をいろいろいつていらつしたとか、まああんな方でさへあんなですからもう學校の行き歸りは氣をつけるんですよ。」

婆やの話しはそれだけであつたけど阿美佐は、少年が東京にいないと云ふ事だけで、すつかりこだわりが晴れて、もう悲しくも驚くやうなこともないと思つた。そしてお菓子を喰べ乍らいつものやうに、生れ更つたやうにはしやいで、今日教會での事を喋り出した。

まるかつた丘は知らぬ内に頽されて、L字型に、その中側は荊の名ばかりの生垣をして、土管や角だつた石がごろごろころがし込んであつた、聳え立つてゐた大きな樹は枝をさんざんに切りとられて、大きな空の下にぽつんと立つて、それは丁度手や足をもぎとられて土の中から掘り出された古代の彫刻の何者かのやうな形で、又それを見ると同じやうな感じを抱かせた。春から夏に掛けてまるい丘の緑の美しい草の中に、白く只一筋の細い路が帯のやうについてゐたのが、いつともなくその草をむしり取られて、惡い病氣にかゝつた頭のやうに、赤白い脹らしい土の表が草の生へてある處より廣く散らばつてゐる。

西側の丘の下り口であつた方はそれよりなほ無慘に崩されて、粘土質の白茶け土に木の根が網のやうに廣がつて、皺割れた土がぼろぼろ落ちるたびに細い根の先きが、極く小さな乾き切つた土の塊りを握つてふるへてゐる。そして毒々しくその半面へ照りつける赤い西日は、皮膚を剝ぎとられた背中へ燃え立つ薪をつきつけてゐるやうである。この町のたつた一つの美しかつた丘は、死骸か何んぞのやうにされて了つて、そして春の遊び場所として、夏の涼み場所として只その否と記憶とのみを與へられてゐるのである。丘の裾に若木の林はいつかはとりはらはれて、ブリキ屋根の騷しい無細工な何やらの工場が建てられ、清水の流れてゐた小溝はそのまわりに同じく建られた安ぶしんの長屋の臺所から流される、臭い濁つた黑い水が滞を押し壞してじめじめとあたりへ蔓延つてゐた。やたらに掘られたり崩されたりして何の手入れもしてない所は小笹が白いほこりに埋められて徒に茂つてゐる。

阿美佐の學校が更つて、しばらく阿美佐の好奇心に忙しい頭から忘れられて居るうちに、丘はすつかり姿も心も更へて仕舞つたのであつた。阿美佐はそれを悲しむよりむしろ好奇の目で驚いた。併

しその丘ほどではないとは言へ、阿美佐の幼げの脱けないその容姿がいつかその間に袂の着物や長い袴をはいて、恥しそうに處女らしいしなを作つて彼の女ももう第十五年目の春であつた。

とある日の夕方敎會の歸りに思ひ出したやうに阿美佐はまわり道をして、そのすつかり更つた丘のだらだら坂を歩いた。せわしない水道町の通りを人や荷車にさへぎられ乍ら靜つとうつむいて歩いてゐるうちに、思ひ浮ぶのは二年前の頃のこの丘の上の出來事である。

日曜の上に、今日は大日樣とやらの緣日といふので、夕暮れ近い兩側の軒下に、露店が器用に小さな臺へこまごまと品物をならべ立てゝゐた。阿美佐はあんまりおそくなつたので急ぎ足に橋の方へ曲ろうと思つてふと向ふの人出の方を見ると紺のソフトを眞深にかぶつて、同じ色の古ぼけた折り襟の上着、そしてズボンへ兩手を差し入れて影のやうに――でなければ古い話しに聞く惡魔に影を賣つた男のやうに歩いてくる男があつた。そして首根へ蟲でも入つた時のやうにぶるぶると頭をふりまわしたとき、阿美佐の頭の中に稻妻のやうに浮んだのは、すつかり忘れられてゐたあの少年の顏であつた。阿美佐はぞつとして背の中から冷水が湧き出るやうであつた。で我れ知らずそこの明るい小間物屋の店へ駈け込んで。

「いらつしやいッ」と云ふ小僧の元氣のよい聲にはつと自分に返つたが、これは何か買わなければならないと思ひついた。そしてあれこれと落ち附きのない氣持でより出してゐる內金が十錢しかないことに又氣がついて、急に又恥しくなつて顏も上げ得ないで、二錢五厘のごむぴんを四つ買ふと、その人らしい影の見えぬのを拍子にそこそこ家へ歸つた。さうして家の敷居をまたぎ乍ら、そつと心臟の上をおさへて見た。

あゝ今日は悪い日であつたと心の奥の方で自分自身にさゝやいた。十錢のびんは多分落したのであらう袂の中にはなかつた。

その後もそれを思ひ出すと白刄のやうに脅かされた。そしてそれは何度も何度も見る悪い夢の醒めぎわのやうに恐ろしかつた。

併しいつかしらそれらの事は阿美佐の心から夢のやうに忘れられて了つた。

――終り――

面影

橋田あさ子

水郷に近いこの武藏野の村の秋も次第に深くなつて行つた。

庭の竹垣には白萩の花が紆つて、夜中に霽つた雨のしづくが、花から葉からポタリポタリと落ちてゐた。庭前の無花果の葉が庭一ぱいに廣がつて、陰氣な離室の部屋を尙更暗くした。ジメジメした黑土の上には蚯蚓の穴が一面にあいて居て、赤い土くれが露と一緒に轉つてゐた。

昌子は此の村に來て××會社の事務員に成つてから、急に自分の身體の瘦せ細るのを感じた。幾夜も續けての睡眠不足は次第に軟い皮膚を荒して行つた。鏡に向つた時、自分の血走つた眼に覺えず身を反すことも少なくない。何といふ此頃の空虛な生活であらう？　年來思つてゐる支那へでも行つて仕舞へば、幾何か新しい生活を味ふことが出來るかも知れない。寧そ今の此の複雜な周圍がなかつたらとさへ思つた。先年出來掛つてゐながら或事情のために支那へ行けなかつたといふ後悔は每日ひし〳〵と胸にこたへた。支那へ行く、何んでもないことのやうだけれども、昌子の頭にはこれが今の氣分の悲しい憧憬の一つであつた。何故自分は慈悲深い母、優しい妹を捨てゝ、異國の支那三界が戀しいのであらう。自分はどうしても忘れられない苦しさを忘れたいが爲に、あの荒んだ野蠻國が戀しい

のであらう。支那へ行つたとすれば、果して自分の思ふやうに忘れられたであらうか？　それも明瞭(はつきり)とは解らないけれど、行かなかつた昌子には、何時までも思出の繪卷を開いたり閉ぢたりするのである。さうしてゐる間に昌子は少しづゝ暗い方へ導かれていつた。

緣の柱に凭れた儘、又遠い昔のことを思つて見た——。

同じ町の中學と女學校とに通つてゐた頃、若い昌子には、男と同じ町にゐるといふことが、どれ程心強く思はれて居たか知れなかつた。女學校の寄宿舍の窓から中學校の屋根がよく見えた。昌子は每晚暮れゆく空をいつまでも飽かず眺めた。日脚の長い秋の日なぞには早くから高い木の影が學校の屋根を黑く見せて、左手の小高い丘の下の赤土の道に、中學生の姿を見ることも度々であつた。そんな時はいつも繪のやうな思ひに耽つてゐる昌子の額は、夕燒に黃色ろく照らされて、窓の影がだん〱薄れていつた。それでも何時までも眺め入つて、暗くなつても矢張り窓際に立つてゐた。その時は外には何んにも思つてゐなかつた。只戀しい人の名をはつきりと思ひ浮べて、自分と一緒にその人がズンズン上級生になるのが嬉しかつた。

それから其人が中學を出て、東京へ行くと定まつた時であつた。何故か悲しくなつて、每晚夜になると泣き明した。出發の日は夜來の嵐が翌朝になつても止まなかつた。そろそろ咲きかけた八重櫻が昨日からの雨で今日は一輪も咲いてゐない。所々に出てゐる若芽が薄綠を見せてゐるばかりであつた。野生のまゝの草花が道の兩側に美しく咲いて、それが雨にぬれて一入(ひとしほ)色どりを濃艶に見せた。川向ふの穢多村の方から瘦せた黑馬が、首をうなだれて木の間がくれに此方へ來るのが見えた。いつもは澄みきつた谷からの流れも、烈しい雨のために赤土色をして凄じく流れてゐた。自分の家から一里ほど

離れた村盡頭の土橋の所まで送つて來て別れた。田舍道を遠ざかる脚絆に草鞋穿きの姿が、木の間に隱れたり出たりして、それが次第に小さく成つて行つた。最う見えなくなるといふ所で、二人は遠くからお辭儀をした。そして暫く立つてゐた。すると急に胸が塞がつて熱い淚が頰を拭いてもふいても流れた。しばらく泣いて顏から袂を離した時は、もう傘の先さへも見えてゐなかつた。ほんとにあの時は悲しかつた。雨の音も、風の響きも、俄かに非度くなつたやうに思はれて谷間に立つてゐる自分を思ふとぞつとする程寂しかつた。それでもそこを動かうともしないで少時たつてゐた——。

その翌年、單調な田舍の生活にあき〳〵して、昌子が都に出て、或女學校に入つた時分はもう男は熊本の高等學校に行つてゐた。だんだん都の風に慣れるに連れて、何時も田舍の美しかつた夢を見殘したやうに名殘り惜しく思はせた。そして只理由もなく感情を傷めたりしてばかりゐた。

又或夏には斯んなこともあつた。それは矢張り同じ學校の小さな寄宿舍にゐる頃であつた。

「お姉樣遊びに行つてもいゝ？」

ふと氣付くと、隣家の登喜ちやんといふ可愛いゝ女の兒が、何時もの垣根のくゞりから覗くやうにしていつたのであつた。昌子は何時ものやうに笑つて默頭いて見せた。そして、

「登喜ちやん、なあに？」と聞いた、登喜ちやんは今拾つたざくろの花を、可愛い手に載せて、じつと見つめてゐる。長いまつげが大きな眼をかくして、口をきつと結んでゐる。

昌子はふと黑い眼が目鏡の下で光つて、常に睨むやうに自分を見る癖のある男の眼を思ひ出した。すると堪らなく戀しくなつて、急いで行つて登喜ちやんを抱き締めた。そして此の儘夜が明けて。日が暮れて、永久に自分とは關係のない世の中になつて欲しい、などゝ思つてゐた。昌子は眞から登喜

ちやんを可愛がつた。

「お姉さま、これなあに?」

昌子は夢から覺めた人のやうに、うつとりと登喜子を見つめてゐた。登喜子の美しい顔は柘榴の花と登喜子を見つめてゐるその昌子とを見くらべてゐた。

「それ? 柘榴の花よ」

「さう、美いね、お姉さんのお庭にはごつさりあるわね。」

「えゝ、登喜ちやん欲しいの」

「えゝ、美いですもの、お姉さんは?」

「私ね、登喜ちやんの方が柘榴より好きよ」

「そりや私だつてお姉さんの方がいゝわ、だけれど柘榴も美いだわね。」

「さうね、ぢや又明日も上げませうね」

登喜子は嬉しさうに凝つと昌子の顔を見てゐた。と、垣根越しに登喜ちやんのお母さんが、

「登喜ちやん。お父さまのお歸りですよ。又お姉さまのお邪魔ですね」

と言つた。登喜ちやんは直ぐに、

「あゝさう。お姉さま又あした、」

と言つて、赤い草履をばた〳〵いはせて、馳け出した。それでもくゞり戸はちやんと閉めて行つた。

とそこへ女中が電報を持つて來て、昌子に渡した。それは男からの上京の報知であつた。

昌子が、其翌日そは〳〵した氣分で、寄宿舍の門を出たのは、街路の塵を巻き上げる烈しい風の日

の午後であつた。街には中元の賣出し廣告の新しい紙が、びら／＼下つてゐたりして、只何とはなく餘計に彼女の心を焦立(いらだ)たせた。電車に乘つてからもハラ／＼してゐるばかりで、赤坂見附の乘換でもうつかりして三宅坂まで行つて、車掌に叱られたりした。やつと昌子が新橋へ着いた時は、忙しさうに行つたり來たりする人の顏が黃色ろく照らし出される刻限になつてゐた。丁度汽車が着いたので、三和土(たき)を歩く高い足音が、急に聞えだした、昌子は下車(おり)て來る人を、一人々々忙しく見てゐたけれども頭が茫乎(ぼんやり)してゐて、迎へに來たその人を見やう見やうとしてゐながら、自分の見識つた顏を識別することが出來なかつた。そしてその汽車は待つてゐた汽車ではなかつた。待つ汽車の着くまでにはまだ三十分も間があつた。昌子は初めて婦人待合室に入つて遮二無二氣を落ちつけやうとした。けれども混亂してゐる頭は何一つ考へることも出來なくて、待つてゐる人のことを思ひながら、何だか遠い昔のことでも思つてゐるやうでもあり。又自分が遠い知らぬ國にでも連れてゆかれるやうな、やるせない感じもしてゐた。同じ待合室に先つきからゐるお雛妓が姉藝者にジャレてゐるのばかりがはつきりと目に映つてゐた。濃くつけた白粉の長い襟足が、燃えるやうな赤の半襟の中に、くつきりと隈をとつてゐた。大きくお太鼓に結む帶の模樣も美しかつた。舞ふ時の足取りや、手の仕草をしたり、長い袂を掴んで見たり、時々は高いポックリ下駄を、そつと上げては音のせぬやうにおとして見たりしてゐた。昌子はそのお雛妓に見惚れて、汽車の着いたのも知らなかつた。が、皆ぞろ／＼と出て行くのに氣がついて、改札口へ急いで行つて見ると、高等學校の制服つけた人が此方へ歩いて來る所であつた。

それから二人は話し合ひながら旅館にいつた。けれども昌子は五分ばかりゐて直き歸つて仕舞つた。

腹立しい、口惜しい氣分が後から後からと押し寄せて來た。長い間家庭を離れて、しかもその頃の昌子には、何んでもよい、只親しみのある溫い言葉に餓えてゐた。さうしてどれ程此日を待つてゐたらう！　此の日を中心とした色々の樂しい事や、嬉しいことを、どんなに心の中に秘めて待つてゐたらう。それを一時に裏切られたやうに思つた昌子はもう一分間も、男の側にはゐたくなかつた。涙も出ない荒んだ心を押へてゐるのに苦しかつた。

「七時では寄宿舍の門限に間に合はなくなりますから、私かへります」

不思議さうに自分を見た。その眼は別れてゐても幾年も忘れられないかの黑い眼であつた。

「さう、ぢや仕方がないなあ、それなら、又明日の朝早くいらつしやい。」

斯うして逃げるやうにして歸つて來ながら、其の夜はさう〳〵一晩苦しい夢に襲はれてねむられなかつた。

何時の間にか日は暮れて、垣根ごしの隣の家では、燈りが映しいほどついて、主人の高い笑い聲が聞えてゐる。何んでも來客らしい、若い男が手を打つて笑ふのも聞える。誰れだか時々廊下を小キザミに步く女の足音も、垣根の間から見える白足袋の動く度に聞えた。

突然宿の女中が燈火を持つて來たので、昌子はやつと今夜仕上る仕事に、取りかゝらうとして机に向つた。

曉方になつてうと〳〵したかと思ふと眼が覺めた。小窓の障子に赤い陽が美しく輝きあたつて、小鳥の聲さへ聞える。昌子は烈しい頭痛のために起き上る勇氣もなかつた。勝手で瀨戸物を洗ふ音や、

座敷にハタキをかける音が聞えても起き上らうとはせず、茫平と取りとめのない思ひに耽つてゐた。そして枕元の時計が七時を指した時は、遲刻して又不快な日を送らねばならぬことを思ふと、いつまで寢てもゐられなかつた。それで急いで起き上つては見たものゝ、何故か身も心も疲れ切つて、少時は机に凭れたまゝ身動きも出來なかつた。やつと仕度の出來た時は出勤時間には二十分しかなかつた昌子は急いで宿を出た。高く晴れ渡つた秋の空と打續く野菜畑の青々しさが、それでも幾らか昌子の氣を輕くした。併し自分の步みてゐる幸福の彼岸に達するまでに斯うした寂しい遽たゞしい日が、どれ程長く續くことかと考へると、自ら心細い感に打たれないではゐられなかつた。(完)

六月の空

小林　益子

長い雨に厭きはてた水子は、近頃終日その淋しい雨だれの音を聞きながら、ぼんやり部屋に閉ぢ籠つて怠惰な日を暮すやうになつた。彼女は朝の食事を終えると、すぐ部屋へ逃げ込んでしまうのであつた。

母親も彼女の沈欝な顔色を見ては、わざわざ茶の間へ引き止めて置くやうな事はしなかつたけれど何となく厭味らしい、言葉をあびせたりした。

水子は氣を變へて時々少し皆と話を交へてゐるといつか、堪へられぬ悲しさと、さびしい反抗の泪が胸にこみ上げて來て、どうにも仕様がなかつた。

水子は出格子の前の簿記臺の上に新聞を展ろげて讀んでゐる母親の後を通つて表座敷に這入つて行つた。さうして萩の障子をあけると、そこへ寄りかゝつて、庭の塀越しに往來を眺めてゐた。

家の中はどこもこゝも薄暗く陰氣くさい。

どんよりうす墨色の空から、小雨がしと〳〵細く光つて、はてなく見ゆる材木の上や其の置場の屋根瓦をぬらしてゐた。

店ではの帳合のそろばんの音がやかましい。
水子は物に壓されるやうな苦しさが頭の內に滿ちて來て、ふとそこを退くと廻り緣を通つて部屋の方へ行かうとした。
「お前、あけたところは閉めるがいゝよ。」母の聲にふと、ふり返つた彼女は習慣性になつたやうに顏色をちらと見ると、再び座敷へ這入つて來てその障子を、靜かに閉めた。
「お前さん聞えたのかね。」
彼女は顏を上げると「えゝ」と云つて母親の方を見た。彼女は新聞を疊んできつとなつてゐた。
「聞えたら聞えたと返事をするがいゝ。」
と、言葉さへ刺々しい。
けれど彼女の心は、やさしく委えてゐた、と云ふより、そんな言葉にはもう慣らせられてしまつてゐるかのやうに今更刺戟も覺えなかつた。
水子の頭はこれまでに疲れ切つてゐた。
その樣な言葉に對して、痛切な悲哀や反感の今更湧くほど熱した張り突めた勇氣は、すつかり見失はれてゐた。
水子はうつむきながらはづれの自分の部屋に這入つてしまつた。
彼女は、机に寄りかゝりながら書棚の本の背文字を念入りに眺めてゐた。隣室から英詩を讀んでゐる弟の低い聲が時々洩れて來て水子には何となくこの日曜の朝が、午後らしく思へた。
彼女の頭は丁度、彈力を失つたしんこのやうに固くひからびてゐる樣であつた。仰げば、こちこち

と音がする様に思はれた。彼女はこの様な空漠とした精神狀態になつてから、どの樣な賑やかな場所に出ても、いつも心が水のやうに冷たく、湧き出る樣な感興を得られなかつた。

彼女は家の者達に對しても、時には恐怖を覺えて、今はもう只自分の心だけしつかり握つてゐたかつた。ほんとの正直な純な心を亂されるのが恐ろしかつた。彼女を馬鹿だとか狂氣だとか云ふ周圍の者の心がいつか知ら彼女の心にも浸入して來るのだと思ふと、堪へられなかつた。

彼女は倦んで疲れた眼を窓の外にそゝいだ。頭のうちには何を考へてゐたのか、何を見てゐるのかはつつきりした印象はさらに見えなかつた。

彼女は立ち上ると廊下の籐椅子のところへ行つて身を橫たへた。さうして彼女は小聲で唄を歌ひ出した。感興がのつてくると彼女はだん〴〵高聲になつて行つた。

ふと水子は自分の聲をしみ〴〵耳にすると、たまらなく愛想が盡きて唄ふのをぱつたり止めてしまつた。さうして何心なく木立のかなたに見える隣りの露臺を眺めやつた。彼女は椅子から身を下すとづか〳〵と緣の端近くに進んで、木立のかなたに動いてゐる姿をぢつと凝視した。

其處に少年が居た。少年は水子の視線にあはてゝ、寫生帳を座敷に投げ込むと、さも今迄讀んでゐたかの樣に懷の本を取り出してページを繰り始めた。

さうして天井の硝子張りの花壇の側にある椅子に、腰を下してしまつた。

水子は何となくむつとして、小石でも投げつけてやりたい樣な、いら〳〵しい心地になつてぢつと睨んでゐた。

彼女は憎しみの心をまぎらすために、あはゝと聲をたてゝ笑ひながら、「あの少年に何か出來るもの

ぢやない」とこの樣な獨語を口に出して言つた。けれど水子は猶もつと憎々しい惡罵をあびせてやらなければ、心が和まないやうな心地がして、見動きもしず少年を見つめてゐた。彼れはよく水子の家の人々の話題に上る不良少年であつた。

いつまでもぢつとして立つてゐた水子は、何となく馬鹿らしくなつて、又元の椅子に身を落して目を瞑つてしまつた。

水子は、何とも云はれぬ厭な氣持ちになつて來た。彼れに對して、つまらぬ反抗を試みた輕卒な自分の態度に云ひ樣のない惡感を覺えた。さうしてちよつとでもくだらない反感を起された彼れの態度が腹立たしくなつた。

彼女は冷靜な心に返ると、自分の行爲を蔑すまないではゐられなかつた。それを思ふと頭の中で何かゞうぢ〳〵ゐるやうな心地がして來て、あはてゝ座敷に這入つて、襖をぱた〳〵閉めてしまつた…。

さうして水子は、机に體を寄りかゝらして物に倦んだやうな疲れにぢつとしてゐた。彼女の心にはだん〳〵と淡い悲哀のやりどころのない淋しさが襲つて來た。

こうして水子は晝頃まで、机の上に、新聞を展げて見てゐたり、書棚の煙草盆を取つて引き出しから沈香を出してこつ〳〵削つてくゆらしながら、その立ち昇る香の煙を不可思議に眺めやつたりして過した。

「ご飯ですよ、柳之助さん。」

弟へお晝の知らせに來たあさやの聲に、水子はやうやく、晝時か知らと氣がついて、机の前の障子を明けた。

空は心もち明るくなつて來て、ながい間の小雨もあがりさうに見えてゐた。

彼女が臺所へ行くと、誰れも彼れも皆一樣にお天氣の事をこぼしてゐた。水子は食事を終えると、縁側へ出て明るくなつた空を眺めてゐた。水子の胸にも何となく輝やかしい太陽の光りがなつかしまれて來た。

然し水子はしみ〴〵浴したいやうな戀ひしさはおぼえなかつた。自分は今このやうに突きつめて白痴になりかけてゐるのだな、と云ふやうな不思議な思ひがする事があつた。

わがまゝな味覺が、美食を貪り、虚飾の美衣を出來るだけ身に纒つて充分物質の滿足を得れば得るほど彼女は益々病痴に近づけられるやうに恐ろしく思へた。さうして自分の好みの食物に對して節約する事を知らない彼女も、やがてその樣な滿足は習慣性となつて厭きを覺えて來た。

その日の午後は思つた通り、雨に濡らされた青葉が淡く日の光に照らされ出した。

それから日、一日ごとに梅雨晴れは、初夏らしくなつて行つた。

理性の支配に生きてゐるやうな冷たい心を持つてゐる水子は、精神的にも慰安を求められなくなつた。新らしい戀愛を與へられても、自我的な利己心が戀を味あはしめなかつた。

愛に行き當れば、彼女の心は悶へ、鬪はなければならなかつた。彼女を戀ひした異性が

「あなたに殺されゝば滿足だ」

と云へば彼女はきつと研ぎすました刄物で刺し殺すであらう。さうして戀に倒れた男が欲してゐる彼女の哀れみは、嘲笑とおもしろさに代つて與へられる事であらう。

「哀れ夕には白骨となりて。」

と、朝に夕に老ひた聲をふるはせて祖母が佛間で唱へるおふみさまの一くだりを、水子はしばしば腦に浮べて、ことさら口すさんでゐた。

强烈な夏の匂ひは、庭の隅から湧き出るやうに草木は若綠の葉をだんだん濃くして、井戸ながしでは洗濯が毎日つゞゐた。

押し寄せてくる自然の强烈な力にどうする事も出來ず、ほとんど空虛の心を抱いて水子は過して行つた。

陰欝な梅雨時の取りさらはれたとひとしく、水子の神經衰弱も何となくうす紙を剝ぐやうにのぞかれて來た。

さうして水子はだんだんと感傷的に落ち入つて行つた。彼女はこの頃の威嚇するやうな太陽の光りを厭ふて、只々物憂さに髮もぐるぐると櫛卷きにして化粧もせずに暮してゐた。この樣な樣子を母達は厭な顏して眺めてるのであつた。

「あの人は何であの樣な厭な顏をしてゐるのだらう。髮も結はずおしまひもしないで、何をくよくよ思ひ案じてゐるんだらうね。」

などゝ云ふのであつた。

水子はこの樣な言葉を聞くと悲しい瞳を上げて母親を見るなり、堪へがたき悲憤に胸をしめられて兩手を顏に被ると部屋に這入つて、机の上に顏をうつ伏せてさめざめ泣き入るのであつた

彼女の目にはいつまでも、まあなんて憎らしいんだらうと云ふやうな母達の顏色がはつきり寫つてゐてよけい悲しさが込み上げて來るのであつた。

水子はその夜、めづらしく月の出を川端で眺めた。南の海から吹いてくる風が心地よく肌に泌みて後れ毛をなぶつてゐた。

部屋に戻つて來た彼女は、氣まぐれに小說本を取つて讀み姑めて見た。けれどわづか二三枚讀むと厭きが來て、そのまゝぴたと伏せるとかすかな吐息をして眼を閉ぢてしまつた。睡眠不足になやまされてゐる彼女の目尻は少しちく〳〵痛んだ。

彼女は立ち上ると、蒲團を出して敷いた。その音を聞きつけて隣室から弟が

「姉さん。寐るの？。」と云つた。

「あゝ。」

「さう僕本貸りたいんだけれどな。」

「いらつしやい。取りに。」

床をのべながら水子はさう云つてやつた。

「いゝ。」

弟はすぐ襖を明けて這入つて來た。さうして寐床の裾の方に立つてゐた。

「持つてゐらつしやい。」

水子がふり返つてさう云ふと、

「あゝ失敬」と云ひながらやうやく書齋の方へ來た。

「今月は僕一冊も買はないよ。」

「なせ。」

「だつて金がないもの。」
「あたり前よ。横濱まで活動寫眞を見に行くんだもの。」
「それだからせびりやしないさ。」
弟はそんな事を云ひながら、寐ころんで雜誌を見てゐた。水子は自分より大きい然しまるで子供のやうな弟を今更眺めた。
柳之助はページを繰りながら、ふとシーツの上にある箱枕の拔けかゝつた引き出しをめづらしさうに取つて、中にある紙を出して見てゐた。
「あらいたづらしちや厭よ。」
水子がさう云ふと、弟はあはてゝ引き出しに紙きれを入れながら、赤く顏を染めて枕をシーツの方へ押しやつた。
さうして雜誌のページをやたらに繰り始めた。
水子は何となくその樣子がおかしいので枕を取つて引き出しを明けて見た。中には鏡と髪かきと小さな異性の寫眞が這入つてゐた。それは水子の大好きな或小説家の姿をエスと云ふ友人が更に別に小さく複寫して送つて寄したものであつた。寐床いでも受け取つて寫眞たけ大切にこんな所に仕舞つて置いたものと思へる。
「馬鹿ね、これは×先生ぢやないか。何と思つたの。」
水子がこう云ふと、はつとして顏を上げた柳之助はますく赤くなつた。
「フヽン。」
水子はお腹の中からおかしくなつてせゝら笑つた。無意味な事でも何か意味が潜んでゐるやうに思はれ、若い女に對する好奇心となつかしさとわけのわからぬ興味にそゝられる、彼等の時代の心理が可愛ゆくもあり、又おかしくも思はれた。

ビアトリス社詠草

今井稠子

——母君に捧ぐ——

稲馨る蒲原平野風渡り母を訪ひたき心湧きくも

新潟の街の甍は見え初めぬ信濃川沿ひ汽車走るなり

初秋の信濃川浪ボチャ〳〵と吾をむかへて流れゆくかも

行き行けば佐渡が島山紫に浮ぶよ浪の遠き彼方に

一つ波足を浸せば右ひだり飛び退く母子入陽の前に

石井俊子

——悲しき従妹へ——

デエラニユーム小暗き窓のかたわらにあはれや紅き太息してあり

一杯にあふるゝ光り受けながら靜かに行きぬ古里の道

此心君に明さんすべしらに只別れしを思へばかなし

山川初子

短か夜をかたりあかして柴の門に君を送りぬ朝つゆふみて

なつかしさあまりてなるか乳母はたゞ言の葉もなく涙ぬぐへり

風なぎし靜かにくるゝ乳母が家の背(うしろ)の森にかな〳〵のなく

夢路をば辿らまほしやこの乳母の乳房にすがり守り歌きゝつ

吉田春子

——ノートの中より——

眞白なる手術服着たる歯科醫がまひるの街をみおろしてゐる

うらさみし秋はすむ此日ごと/\とくりやにも
のを切れるわれかも

ひそやかにゆふぐれせまりもくせいの花ちる門
にみじろがであり

りか子

われを一人此山奥の湯の宿に殘して君は歸りゆ
くかも

いざ吾も都をさして歸らなん暑き都に君と居ら
んめる

君一人淋しき家に歸りゆく後姿を見てゐる吾は

別れてはいとなつかしき此心相見て後もつゞけ
まほしき

にはかにも五人となれる我家族わづらひ多くな
りにけるかも

飯島富久子

その花の表紙にあれば雜記帳使ひしといふ君は
寂しき

路けゆば黄なるほこりの我が裾にまつはりつけ
り夏の眞晝日

杉淵梅

ひとり衣縫ひますおん姿病みて見て居るはさ
びしき夜かも

森は今靜かに暮れぬ鳴く鳥の聲もしめりて木だ
まにひゞく

眠りなばまたさむることあるまじき此森林の靜
けさに居る

きのこあさる山のうしろに陽は落ちてかなしけ
ればうたうたひ出す

暮れかゝる空を仰ぎつゝまた一つきのこあさるも
さびし秋の雲

きのこあさる野に日のくれて子を呼ばふ母もあ
るかな松風の音

吉田玻璃子

まひるまのレールの上にこほろぎが死にころが
りてゐたりけるかも

かにかくに心ばかりは安けくと野行き街行き家
を忘れぬ

病みてある秋は悲しもまひるまもほそ/\とな

き秋ふかみたり

物思ふ子にふさわしき秋なれば裏木戸により涙
ぐむかな

おそ秋の大空の下に赤らみて一つのこれる柿の
淋しさ

星　長　晴　子

廢後のあれし廣庭のかれポプラ靜に立ちて淋し
き秋

病める身に一入かなし初秋の空まつさをにすみ
渡るかも

父をまつ母と娘がいそ〲と縫ふか衣の袖は寒
けし

市川の松の林に初茸は頭もたげてつゆにほほへ
る

＊　＊　＊　＊

月遠し永く離れて君想ふ心はかなし磯千鳥かな

思ひ見る君が姿のまぼろしに消えもやらずに見
ゆる嬉しさ

嬉しくも君が御文の音づれに又新たなる戀に入
るかも

故女流作家追慕會の記

ビアトリス社の第一回のいとなみ故女流作家追慕會は愈々十月十五日の午後一時から芝の古刹青松寺で催されました。此日の空は朝の中からしめやかな時雨模樣となりましたが、それも柔かな濡れ色を蛇の目の傘に止める位で集まる人々には却つて感じの深い、會にはふさはしい秋雨でありました。定刻前にもう五十餘名のお顔が揃ひました。五明倭文子氏が淑やかに開會の辭を述べました。次には一同本堂に移り、一山の僧侶がいとなむ嚴かな法養に列して、故瀨沼夏葉女史令孃を初めとして岡田八千代女史、ビアトリス社代表杉浦翠子女史の順に一同燒香を終りました。やがて又故三女史のお寫眞を並べた會場に歸り、席を正して、山田邦子氏の追慕の感想、久保田富江氏の一葉女史の小說朗讀終り、次には當日快く出席して下すつた馬場孤蝶氏が、一葉女史に關する「文學界」當時の思ひ出多い話をされました。女史の修養時代や文壇に出た模樣や其の臨終前の事等が細かに皆なの心に刻まれました。庭前の泉石にはさらさらと水聲が響いて、身は閑寂な深山にゐるやうな感に打たれました。特に一葉女史は中性の感じを與へるいくらか鐵火(てつくわ)な女であつたといふ氏の談は興味がありました。次に生田長江氏は雜感を述べられましたが、かうした故人に對する追慕とともにビアトリス社の人々が一層しつかりして、道理を以つて世に訴ふる處のあるやうにとの忠告は本當だと思ひました。其後座談の間に青柳有美氏は大塚楠緒子女史に對する追想談をせられました。女史は手紙を美しく書かれる人で其の卷紙は奉書に金を散らしたものであつた等といふ趣味深い事も伺はれました。斯くして午後五時すぎ、山田たづ子氏の愼ましい閉會の辭で一同散會いたす事としましたが猶ここにかしこにしんみりと話し込んで何れも立つのを惜しんで長い間灯の下で故人今人の物語にふけゆく秋の哀れ深い夜の情緖に沈みました。

　當日の來會者

馬場孤蝶、生田長江、河井醉茗、秋田雨雀、青柳有美、安成二郎、西村陽吉

其他新聞記者各氏

瀨沼ゐつ子、岡田八千代、田村俊子、長谷川時雨、尾島菊子
岩野淸子、山田邦子、杉浦翠子、五明倭文子、岡本かの子
山田たづ子、生田花世、櫻井八重子、望月れい子、秀しげ子
岩淵百合子．其他會員諸氏

新刊紹介

大正六年短歌日記

■大正六年度の短歌日記が、例年の通り東雲堂から發行された一頁を二日に仕切つて、まんなかに六號で、古今の人の秀歌を刷り入れてある。年々新らしい趣向をこらして、氣持よくしやうと細心の注意を拂つて居るらしい所がよく見える、其いゝ、はしがきにも書いてある通り、日毎に起り又忘られてゆく生活の感銘や情緒を托すつもりで、此短歌日記一册に、日記に代へた短歌をしるしてゆくならば、ずゐぶんおもしろい後の紀念となる事であらう。短歌の愛好者修業者、及び若い人々の机の上を飾るにふさはしいものと思ふ。獨附錄としては萬葉以後各時代から代表的な人を拉し來りて歌人列傳をつくり且つ明治大正詩歌年表として、新詩歌勃興以後刊行された詩歌集を年月順にあげて研究者の便宜をはかつてある、紙も良いし、カツトもなかなかおもしろくて氣持がいゝ。(定價四十五錢、東京市日本橋區檜物町九、東雲堂發行)

■情話叢書第二集お夏淸十郎、岡田八千代氏著櫻井八重子氏裝禎、あでやかなお夏が戀の色のやうな美しい緋鹿子に人形の首を挿いた情話場にふさはしい裝禎である。美しい淸十郎とみな川に似たお夏の戀が絢爛な筆で描かれてゐる。秋の長夜に燈下の下で繙くには適はしい事であらう。

編輯だより

■前號で御報告申上ておいた通り、又本誌がそれを報ずる通り十月十五日にビアトリス社第一回の催として、故女流作家追慕會を芝の青松寺で開きました、其會の模樣は、どなたかのお筆によつて、くわしく本誌に發表される事と思ひます、私は少しばかり其お臺所口の方を報じたいと思ひます、さういふ事には一向なれない、しかも呑氣屋ぞろいの樂屋の事とて皆樣大汗になつて、雨の降るのに東西を走せまわつたにもかゝはらず、いろいろの相談が打ち合せの時間に狂ひが出來てつい出來なかつてしまつたり、後から考へればさうすればよかつた、と思ふ大切な事などを、とんと忘れて居たり、手おくれやら、ぬかりやらで其日になつて冷汗を流したりハツと胸を轟かせたりする事が澤山でさすがの呑氣同人も此度こそは氣をつけませうねなどつくづく言ひ合つて、此會の前日に翠子樣の御良人非水樣が、「大丈夫かい、天下の人を集めるんだよ」と幾度も危んでは念を押して下されたといふ御言葉がつくづく思ひあたる次第でした。とは申ものゝ、岡田八千代樣始め先輩の女流作家の方々が何彼と御心添へ下されたのでお集り下されたお客樣には、たゞ子樣が手ちがひばかり出來て泣き出しさうになつた事も、しづ子樣が大あはてで菓子屋にお菓子の追加をした事もまづ分らずに、しまひにはみんな　ち寄つて「よかつたわねエ」と安心と、嬉しさの笑顔を仲よく向け合ふ事が出來た程、快い會になつて散會する事が出來

ました、私は此度の會には、わけて申譯のない事だらけです身體の具合のわるかつた爲相談會にも出ず、又會の當日も、丁度靜岡の舅が急病だといふ知せが三四日前に來た所でしたので歸國するかもしれないといふので出席出來るか否かさへも分らない有樣でしたので、みんな皆樣にお願ひしてしまつて居りました、こんなやうでしたので、十四日の私の宅で開くべき最後の相談會も、時間に狂ひが出來てつい出來ないでしまひましたので、まご〱してゐるうちに私としてのお知せ申上べき方々へも、お知せが出來ないし同人の間でもさうだつたと後できゝました、尤も特に御招待はどちらへも致しませんでしたこれも後できゝました間に十五日になつてしまひました、ほんとうに申譯ない事をしてしまつたのです、けれどもこれは私かういふ事に慣れない爲、いつまでもほんやりしてゐた罪で、其罪の責めは充分に受けますが、横着に御知らせを怠つた譯では決して〱ないのですから、どうぞ許して下さいまし、ほんとに私はさういふ點には殊に頭腦が惡くていつまでもぼんやりとしてゐて足もとに火がついてからあはて出しては自分もすまず人樣にもすまない思ひを致しますかういふ譯ですからどうぞ其點でお責め下されてゐかつた處をお許し下さい。（以上山田邦子記）

■故女流作家追悼會の節田村俊子、岡田八千代、長谷川時雨、尾島菊子の諸氏から香花料として金封を下されまして厚くお禮を申述べます。尚時雨氏からは他に御見事な花輪も頂きました此處にお禮を述べて置きます。

■尚當日青山南町六丁目有終園主鈴木珠子氏より花籠を戴きました厚くお禮を申上げます。

■ビアトリス社維持會　ビアトリス社では社の基礎を強固にし尚他にも出版其他に手を延したいため、今度ビアトリス社維持會と云ふものを設けました。

■ビアトリス社維持會には甲種と乙種との二樣あつて、甲種は維持費として毎月金一圓を納むるもの、乙種は毎月金五十錢を納むるもので期限は何れも一ケ年です。本期限後甲種は二ケ年間は雜誌ビアトリスの寄贈をなし、尚其期間にはビアトリス社出版の書籍を寄贈するものといたします。乙種は期限後一ケ年間雜誌ビアトリスの寄贈をいたします。

■今迄それ〲心當りの向きへは直接お話したり、又手紙でお願ひしたりいたしましたが、まだ御遠慮申してお願ひいたしませぬ向もございますからもし皆樣の方で御援助の好意をお寄せ頂かれるならどうぞ御入會御申込みの程お願ひいたします。

■尚維持會員は社員に限らず、文藝研究會の方でも又は一般男女の方でも何誰でもよいのでございます。尚維持會に御入會の方には社費及び會費は頂きませぬ。

■前月號寄贈雜誌　スネーク、日本浪人、趣味の友、一大帝國、女の世界、淑女錦報、家庭の友

雑誌規定

□毎月一回一日發行

□定價一冊金貳拾五錢（郵税壹錢五厘）

□前金購讀料四ヶ月分（壹圓）　六ヶ月分（壹圓四拾五錢）
一ヶ年分（貳圓九拾錢）

□廣告料一頁　特（三拾圓）　一等（貳拾圓）　貳等（拾五圓）
三等（拾圓）　半頁（五圓）

□郵券代用は壹錢貳錢に限る（但し一割増）

□編輯、經營、會員申込上の事務は一切ビアトリス社宛
のこと

□原稿〆切期日は十日限りとす。

大正五年十月廿八日印刷納本
大正五年十一月一日發行

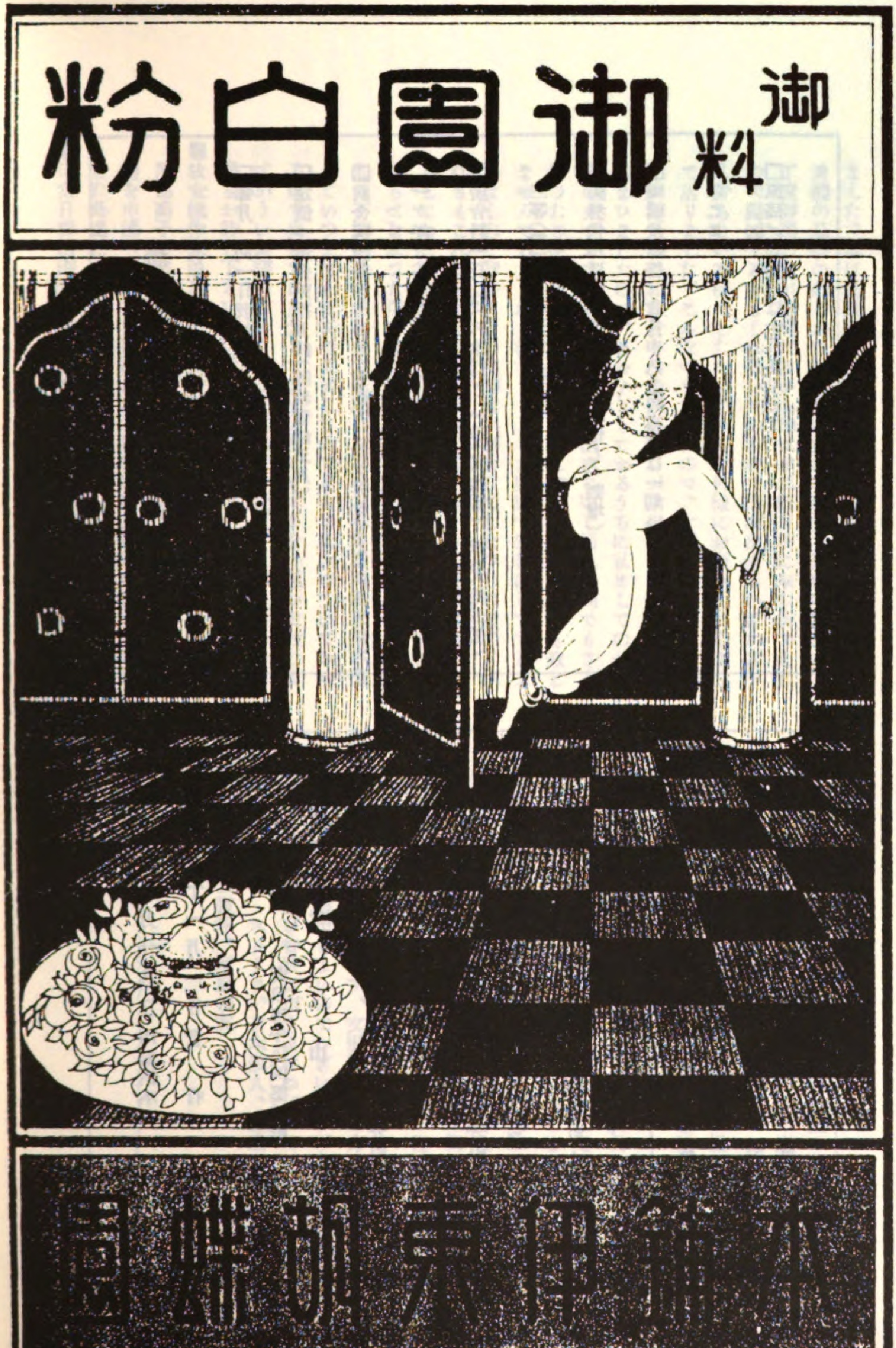
編輯兼發行人　東京市牛込區築地町六番地　山田たづ

印刷人　東京市麹町區紀尾井町三番地　金澤求也

印刷所　東京市麹町區紀尾井町三番地　元眞社

發行所　東京市牛込區築地町六番地　ビアトリス社

發賣所　東京堂　東　堂　良明堂　北隆館


御料
御園白粉
本舗
伊東胡蝶園